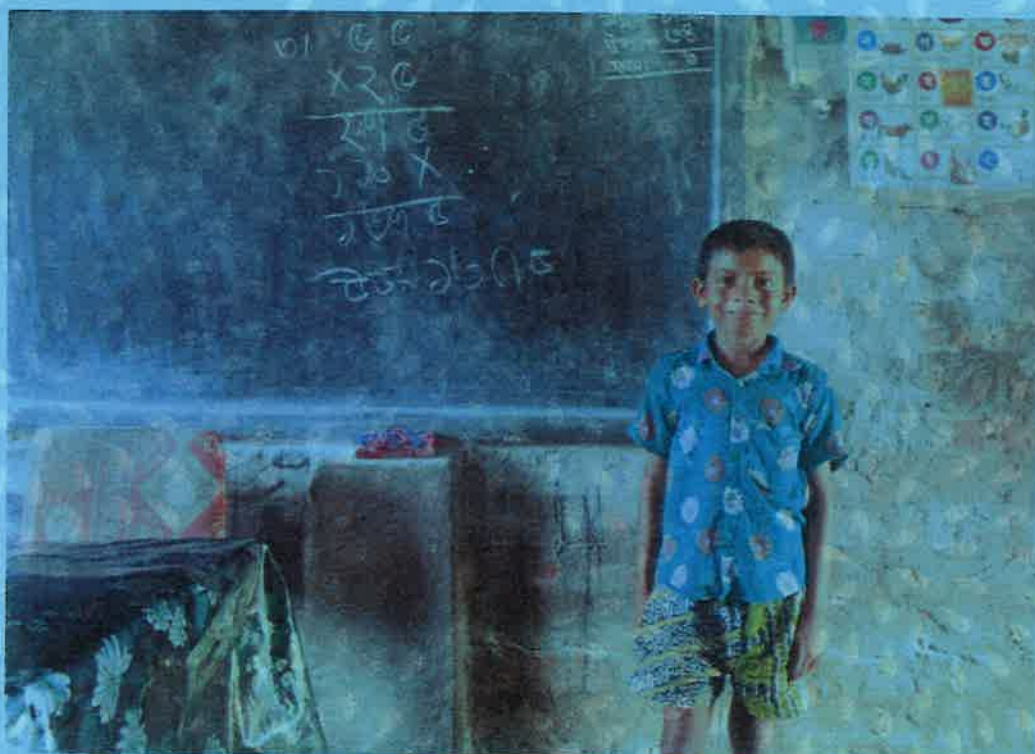


おしゅびだない！

ACEF45th Study Tour in Bangladesh

2013. 8. 14 - 8. 27



目次

* 参加者名簿		2 ページ
* ACEF・BDP 紹介		3 ページ
* バングラ インフォメーション		4 ページ
* スタツア準備会		5 ページ
* ごはん & ファッション		6 ページ
* 街かどスナップ		7～8 ページ
* 45th スタツアメンバー紹介	A チーム	9～10 ページ
	B チーム	11～12 ページ
* BDP スタッフ紹介	ポリシャル地区	13 ページ
	ネトロコナ地区	14 ページ
* BDP スタッフ紹介 2 (プーバイル地区) & JICA 隊員紹介		15 ページ
* バングラコラム		16 ページ
* スタツアライフ		17 ページ
* 厳選ベンガル語日常会話集		18 ページ
* スタツアこぼれ話		19 ページ
* おもひでぼろぼろ		20 ページ
* 日程表		21 ページ
* 活動報告	プーバイル地区	22 ページ
	ポリシャル地区 (A チーム)	23～24 ページ
	ネトロコナ地区 (B チーム)	25～26 ページ
* 感想文		28～47 ページ
* 編集後記		48 ページ



Aチーム(ポリシヤール地区)

1	吉岡 康子	青山学院女子短期大学宗教主任	日本基督教団吉祥寺教会牧師
2	前田 恭子	ACEF事務局長	日本基督教団田園調布教会会員
3	高杉 知美	東京女子大学国際関係専攻3年	浦和福音自由教会会員
4	李 相珉	東京女子大学コミュニケーション専攻2年	東京マンナ教会会員
5	田中 希実	東洋英和女学院高等部3年	日本基督教団銀座教会会員
6	窪川 みかげ	山梨英和高等学校2年	
7	齋藤 和歌	共愛学園高等学校2年	日本基督教団高崎教会出席
8	下田尾 萌	共愛学園高等学校2年	日本基督教団高崎教会出席
9	大山 晏奈	東洋英和女学院高等部1年	日本基督教団西大井教会出席
10	佐々木 実紀	東洋英和女学院高等部1年	日本基督教団原宿教会出席

Bチーム(ネトロコナ地区)

1	ロビン・アンダーソン	共愛学園中学高等学校教諭	日本基督教団高崎教会出席
2	井上 儀子	ACEF事務局員	日本基督教団浦和東教会会員
3	永野 拓也	共愛学園中学高等学校教諭	神戸聖ヨハネ教会会員
4	木谷 実	同志社大学神学部4年	日本基督教団八日市教会会員
5	見供 瞳	青山学院大学総合文化政策学部2年	福音伝道教団大間々キリスト教会会員
6	森 泉貴	東京女子大学国際関係専攻2年	
7	土屋 美奈	東洋英和女学院高等部3年	日本基督教団安藤記念教会出席
8	志倉 也美	共愛学園高等学校2年	
9	佐藤 真依子	東洋英和女学院高等部1年	金町教会出席

ACEF アジアキリスト教教育基金 とは

日本の学校や幼稚園、教会、団体、有志などの協力のよって、バングラデシュにある NGO の BDP と共に、バングラデシュ国内に寺子屋(小規模学校、初等教育)を贈る運動を行っている NPO 法人です。1990 年に設立され、2004 年に特定非営利活動法人(NPO)として認められました。また教育支援だけでなく、アジア諸問題に取り組む青年の育成も目指していて、年 2 回のスタディーツアーや、ACEF セミナーを実施しています。

BDP(Basic Development Partners)

バングラデシュで学校に通えず、街で物売りをしている子ども達が働きながらも通える寺子屋学校を開いて、1 人でも多くの子ども達に教育の機会を与えることを目的としたキリスト教系 NGO 団体です。1990 年に Dr. ミナ・マナカール女史により SEP(Sunflower Education Program)として寺子屋運動が始まりました。その後、運動はプーバイル、カティラ、ジャマルプール、ボクシガンジ、ネトロコナ地区へと広がっていき、1990 年に政府から正式に NGO としての許可を受け、BDP へと改名しました。現在 82 校の小学校と 2 校の職業訓練校があります。

Bangladesh's food

☆ Breakfast ☆

朝ごはんには、「ルチー」と呼ばれるうすいパン生地にしためた野菜をほいて食べました。それにプラスしてゆめ卵も1枚ありますね Good taste! 朝からモグモグたべられました!!

☆ Lunch & Dinner ☆

お昼と夕食は共にカレーが中心でした。カレーは、チキンカレー、ビーフカレー、魚カレーが主でした。そしてどちらの食事にも、ダルスープという豆のスープがついていますね。それと、サラダもついていて、サラダの中にはカチャモリスというチリがまぎれていました。



ごみは金で買うんだよ!!

ダルスープ

カレー

カチャモリス

☆ Dessert ☆

食事の後はバングラデシュのフルーツがデザートとして出されました。その中で一番人気だったのがマンゴーです。とても美味しく、本当においしかったー♡

マンゴー

☆ サロワカミューズ ☆

チェニウクのような上着で、ズボンスカート3点セットでとてもすずしくかわさやすい服です。色はたくさんあって、おもしろいレパートリーです!

☆ レンギー ☆

男性用の服です。スカートのような見た目で、1枚の布でできています。写真の家庭が着ているものは、結婚式の時に着られているものだそうです。

☆ サリー ☆

日本人も一度は知っていると思いますが、有名な民族衣装サリー。現代の方のものをおかいて、いざしてみましたが、思ったよりも重く、はきにくかったです。1枚の布でヒダをついて、してすじなと思えば、あてやかでとてもきれいな衣装でした。

☆ メンディー ☆

手にメンディーをしてみたい。1週間もすると、色がうすくなって、じきに消えていきます。

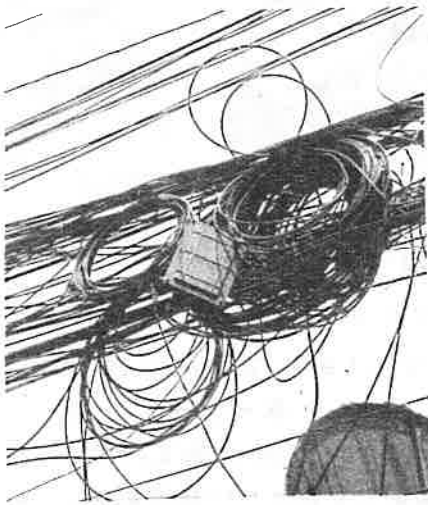
☆ サロワカミューズ ☆



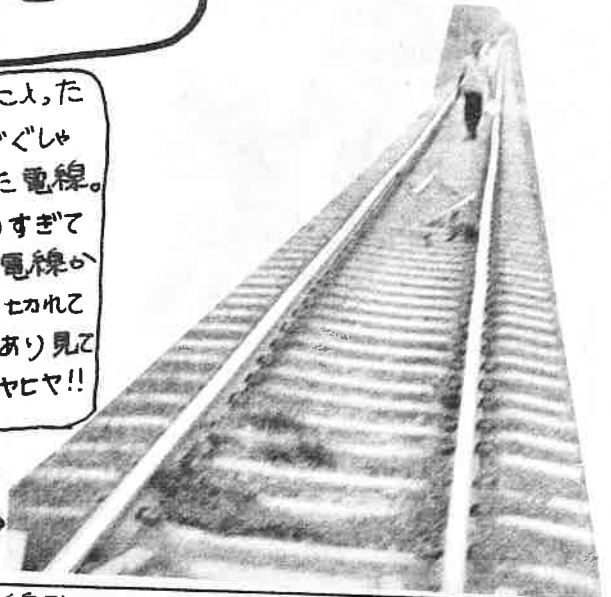
Bangladesh's fashion

街々人々の様子♪

家畜・犬



タッカご目に入、た
のか大量でぐしゃ
ぐしゃにな、た電線。
いっはいありすぎて
どれがどの電線か
わからないう、たれて
いる電線もあり見て
いるだけごヒヤヒヤ!!

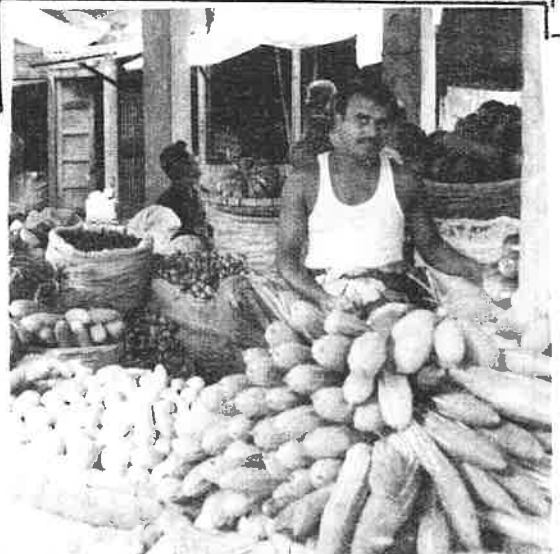


線路の上は バングラの人にとっては歩道!!!
そして 線路の両側は、物売りの人で
いっはい!! もちろん 電車の屋根の上にも
人が乗っている。法律では禁じられている
みたいだが、お金がない人はしかたがない
のかな...?? でも 怖い!!!

どこにでもある裁縫屋さん。昔ながら
の足踏みミシン。サロワカのウエストや
スカートなど 長い時もゆるい時安く
直してくれます!



バザールには、たくさんの食材がきれいに陳列
されている。買い物に行くのは男性の役目!!!
毎日 買い物に行ってくれる(ニワト)は生きたまま売って
いる。



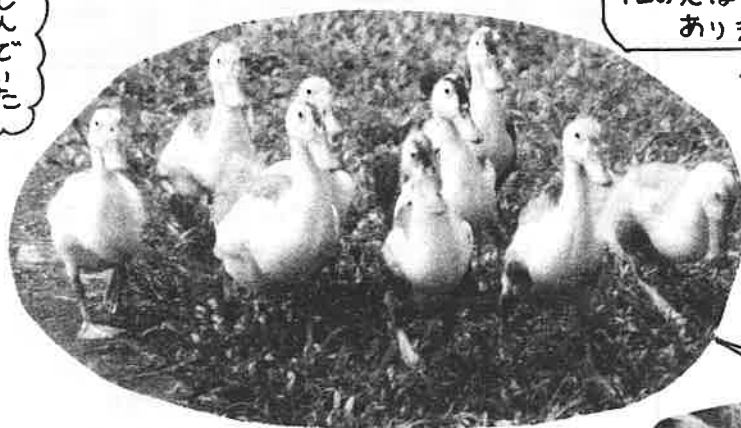
おしゃべりなおじさんはヒゲをのほろけで
オレンジ色にそめていた!!

男性の人々は、時間があたらちを飲んで楽しんでた



ため池 in カティラ

この池で なんでもこなす人々。洗濯、お風呂、
はみがき、食器洗い!! みんな なんの抵抗
もなく 飛びこんで行く♪ 車の中のマットも
洗有りをつけて洗い、そして洗い流す。でも
他の人は 気にせず口をゆすぐ!! 日本では
ありえないことをたくさん見せてもらった♡



家の周りにはたくさんの家畜。牛、にわとり、
あひる、やぎ、そして犬 時々猫。

朝から夜まで たくさんの動物に
出会う事が できる。にわとりは
私たちのために 1匹ずつ きていくの
悲しいけど おいしいから いつのまに

その事は忘れてしまう。

だけど 感謝して

頂くことが
できた。

おー子さんとサンミン 本当に犬が
大好きな2人♪ バングラデシュは
どこに行っても たくさんの犬が
いる。カティラで 毎日 見かけて
いたのか (エマリン、ジュンちゃん)。

私たちがごはんを食べている時に
来て、食べ残しや 骨をもらうために
静かにじ〜と待っていました。

そして スタッフやおー子さんが 食べ残しを
あげたら喜んだ顔をしてくれ その笑顔に
私たちも いせされました。



A team★



すーこさん

超おもしろくて、毎か中何に
こころよく愛するチームリーダー！
牧師さんであり、友達の先生。

みき

元気いっぱい、毎か中何に
いつも暴睡!!
ごうさん LOVE♡

みかげ

元気、明るい、かわいい♡
子どもたちに大人気!!

あんちゃん

一見おとなしそうに見え
実は毒舌?!
人と笑いかつむずね2封。

(9)

めみ

かわいく2バングラboysに
モチモチ♡鳥を見ると
叫んで逃げ出します。





とみー

韓国語も喋れて、ピアノもひける 素晴らしい大学生のボロ(大志い)Girl♡

わか

Aチームの公式カメラマン!!
となりの子はわかの子
です!!笑



きみ

和歌山県中ではいつも暴睡
PART2!!
フェリーで迷子になっちゃった。



さんたん

明るくて歌が上手な
韓国出身の大学生!!
BDPスタッフにモテモテ♡



きょうこさん

素晴らしいACEFスタッフ!!
怒るところいい!!



KATHIRA



おあー！ おあー言葉
は後からくる面白さが
あって、みんなを笑せて
くれていた存在。
細いかにたくさん食べて
BOSSのお腹にハロ
なんにでも興味を持って、
いつも笑っていたのが印象的！
同じ年なのにあたしより
勝ちついて、年上におえ
たー！！



Hitomi

上書きするのが大好きなんだし！
昔と仲良くなれるや不安だった
けど、みんないい子で仲良くおあて
あったー！！
唯一、BOSSに仕事の際にいい
ら来たメンバーでして（笑）
おあーおあーおあー！おあーおあー
おあーおあーおあー！（笑）
チームBのおあーおあーおあー

愛のムーヴ

チームBのスタッフさんの4才の子供と
あじく可愛いくて、チームBのいざしの存在。
別れや別れしてみんながムーヴをつれて帰ったこと。
このsmileにもう一度
会いたーい

member ♥

~Metrokona~

一番年下なのにびっくりする
くらいしゃりもの、まいにー！
常に子供と遊びまわって、みんな
から、「まいこー！」ってあうと呼ぶ
おあーおあー。元来一杯のまいこ

はチームBの来っ子
だけど中身は
おあーさん！

見た目はクール

なのに、本当はおちゃめじ
淋しゃり屋で、クマのブーがこの旅の
おあーの、たくさん笑って、たくさん話して性格のいい
がたまらんの、もっとたくさん話してあったー！
このキャライ保、これ！！笑

Mina



Maiko

常に落ち着いている
イメージのなりみ！でも
笑いのリボは案外浅いやも？
とっても話しかく、みんななりみ
の会話は私的にあもは
がた！（笑）ネットコトでリレ
だけ虫に強くなったかも
しれない？！wwwしゃり者の
なりみ、ありがとー！



Narimi

Noriko

我がチームのまめ
存在の、のりこさん!!
お得意のギャグで皆を
終始笑わせてくれた!!
優しくみんな
を見守ってくれるのりこ
さんは、チームBには
欠かせない!!

Mizuki

B team リーダーのロビン
いつもニコニコ smile が可愛くて、
リーダーとしての責任感もあって
優しいお淑やかなリーダー!!
ロビンの場をなごませる才能は
チーム1のスタッフとの通訳もしてくれ
やさしいチームリーダー。
みんな大好き Robyn じ

B team

Robyn

ムンサ!
補ロコナ番の
チャウ男!(笑)
たくやさんとみのるくんには日本語
を(関西弁)教えてもらい、すぐ
上達するすごい男!!! 優しい、
写真が大好きな、
僕の Boyfriend!
(笑)

Minoru

Takuya

Team B の 関西男児 コンビ☆
たくやさんは、とにかくおもしろい。
人間たくやは本当に笑いのツボが
みのるくんとおササエさんも、空
港で頑張っていたスリッパも大ウケ!!
BOSS さんのからみも印象的(笑)
The 100% モリス男!

みのるさんは、よく考えるお兄
さんの位置! ムンサとの関西
弁トークは本当におもしろく、皆の
お気に入り! けん玉ではスゴ技
をみせてくれた!!

サンミンです★ 私はAチームのお世話になったBDPのスタッフさんたちを紹介します★

問題あり?問題ない!ヘモントさん★

ヘモントさんのトレードマーク問題あり?問題ない!です。
ヘモントさんはベンガル語はもとより英語さらに日本語も上手です。
ヘモントさんはAチームのガイドを担当してくれました。私たちと
バングラデシュの人々間の端になってくれました。またいろいろな
楽器にも多才多能するヘモントさんでした。ヘモントさんは毎日
朝食の時新聞を読みながら朝ごはんを食べたが、その姿がAチーム
のお父さんのように見えました。お父さん～



誰も真似できない運転実力!スーパードライバニキルさん★

Aチームの運転を担当してくれたニキルさんです。いつも笑顔で歌
を口ずさんだ可愛いニキルさんは皆に大人気です～音楽が流れると
自動反射的に踊るニキルさん～しかし、可愛いニキルさんが運転席
に座るとスーパードライバにかわります。誰も真似できない運転実
力で走ります。ニキルさんが行けない道はなさそうです。いつもニ
コニコ笑っていたずらが好きなニキルさんだけど、ドライバになる
瞬間強烈な野獣に変わってしまいます!ニキルさんどの姿が本当の
ニキルさん?

奥さんとラブラブしているダニエルさん★カティらのスタッフ

私たちの宿にくもをはじめてこうもり、かえるなど色々な野生の
友達が訪ねたが、その野生の友達を追いつけてくれた方、ダニエルさん
です。勇ましい姿の後ろに隠されている姿、ダニエルさんと奥さんの
ラブラブ姿を見ちゃいました～確と握った二人の手～ラブラブ～
実は私の犬の名前もダニエルです。私がその事実はダニエルさん
に告白するからダニエルさんは衝撃を受けました。しかし、ユーモラスに
犬の鳴き声を真似してくれました～ダニエルさんセンスがいいですわ～



ちょっとを叫ぶ長老様ビブルさん★カティらのスタッフ

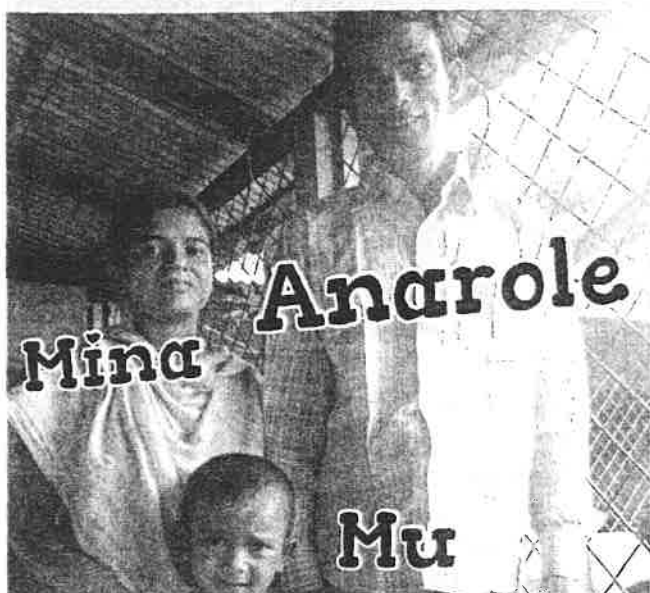
ビブルさんは食事の時間たびに私たちの後ろでちょっとちょっと
を叫びながらおかわりをしてくれました。カティらに行って体
重が増えました!ビブルさんのちょっとちょっとに慣れてしまっ
て、カティらから帰ってきた日の食事の時、チームの皆は元気が
なかったですわ。ビブルさんは皆に長老さんと呼ばれましたが実
は牧師先生の仕事をしていますとします～

魔性のただいまジョンさん★カティらのスタッフ

ジョンさんの第一印象は冷たかったけれど、実はよく笑ってくれて、
いたずら好きな人でした～しかし学校の子供たちを指導する時の
ジョンさんのカリスマは隠せないです!ジョンさんも日本語ができま
すが、特にジョンさんの魔性のただいまはジョンさんの
トレードマークになりました!私たちが食べる果物を買ってきたある
日、サングラスを脱ぎながら、ただいまと言ったジョンさんに皆は
はまってしまいました。ジョンさんのただいまは正しかったです!



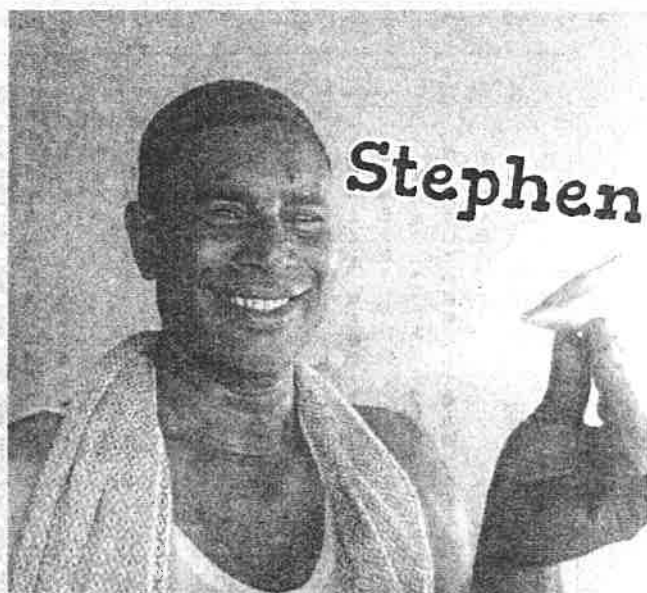
私たちがバングラデシュで安全な生活ができたのは全てがBDPのスタッフさんのおかげです。
本当にお世話になりました。一緒に生活した瞬間は永遠に忘れられないです。本当にありがとう
ございました。★



Mina

Anarole

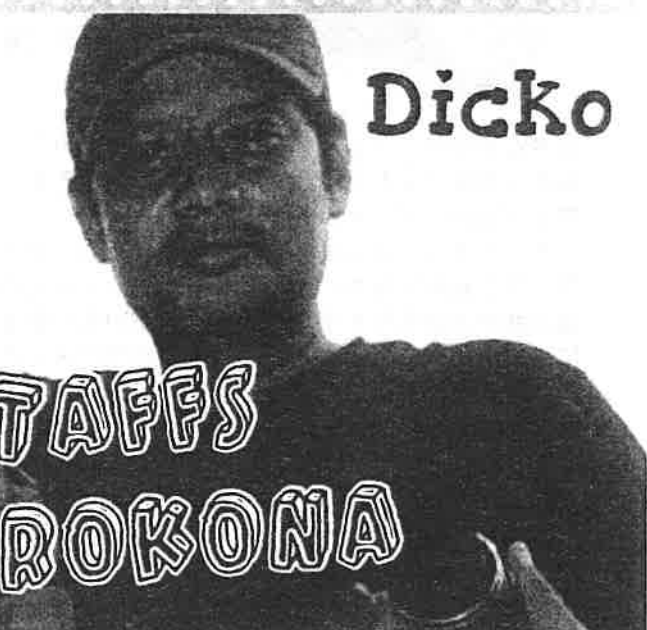
Mu



Stephen



Habib



Dicko

BDP STAFFS
IN NETOROKONA



Yashin



obasan

obasan

BDP (アーバイル) スタッフさん

オシムさん

BDPスタッフさん
 昼は静かなのに夜にはノリノリの
 腰7リダンスを披露♪ ステキでした(笑)



オモルさん

BDPスタッフさん
 ジミーとマツ子(うさぎ)アーバイルではオモルさんの通う教会に行きました!!



アルボートさん
 BDPのボス!

ジョーリ大好き♡
 面白いけど、絡まるとうっぴしめんどくさい<

オモル Jr.

BDPスクールの
 カルチャーショーで
 キレッキレ(?)のダンスを
 披露したウサ
 笑顔がキュート♡



ジミー大西(仮)

ごうさん

子どもたちとすぐ仲良くなれる
 JICAのイケメンタ
 アーバイルでだけでなく、
 Aチームはカチンラでも、本当に
 お世話になりました!!

さずかさん

ごうさんの後任のお姉さん。
 アーバイルと一緒に活動してくれました♡
 色々なお話を聞いてよかったです。
 あと1年半、
 頑張ってください!!



JICA★



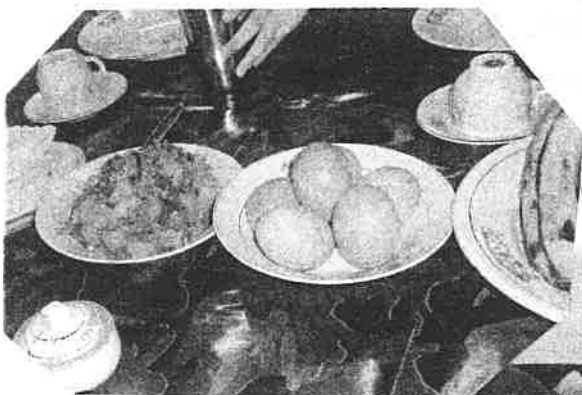
「バングラコラムーあなたと私とバングラデシュ」

同志社大学 木谷 実

「日本はバングラデシュの50倍も豊かな国だと言われている。この国にいる間に、そのことについて考えて欲しい。」BDPのダイレクターであるアルバートさんから、私たちはこのように問いかけられました。今回のツアーに参加されたみなさん、そして今までのツアーに参加してきたみなさんは、この問いの答えを見つけることができたでしょうか。日本よりバングラデシュの方が発展しているし、そりゃあ豊かだろう。でも、豊かさってなんだろう？その答えを探して、私は頭を悩ませました。日本にあって、バングラデシュに無いもの。バングラデシュにあって、日本に無いもの。様々な事柄から答えを出そうとしました。しかし、私には万人が納得するような答えを見つけられませんでした。豊かさとは何か。それをいくら説明しようとしても、抽象的なものにしかありません。それは、人それぞれの本質的な部分に関わるもの、根底に残っているものだからだと私は思います。私が豊かさを感じて、満たされたとき。そこにはいつも人間がいました。その人たちとの出会いがあったからこそ、いまの私があります。バングラデシュでも多くの人に出会いました。その人たちとの出会いは、私たちにとって豊かなものではなかったでしょうか。あなたと私とバングラデシュ。私たちはたくさんを経験し、考えました。どの思い出の中にも、バングラデシュの誰かである「あなた」がそこにいたはずです。一人だけでは、これだけ豊かな時間を過ごすことは出来なかったでしょう。そしてバングラデシュでの日々が終わり、私たちは日本の日常へと帰ってきました。この日本でどう生きていくか。今度は私たちが自分自身に、問いかけていかなければならないことではないでしょうか。

BANGLADESH

LIFE



Food

& Kitchen

モジャ



食事は毎日カレーでした
バリエーションが豊富で
全然飽きませんでした!!
本当においしかったです。
もちろん手で食べましたが

Room

初めは全く慣れず、食べるのにひと苦労でした。でもすぐに慣れて、手で食べるのがとても楽しかったです。

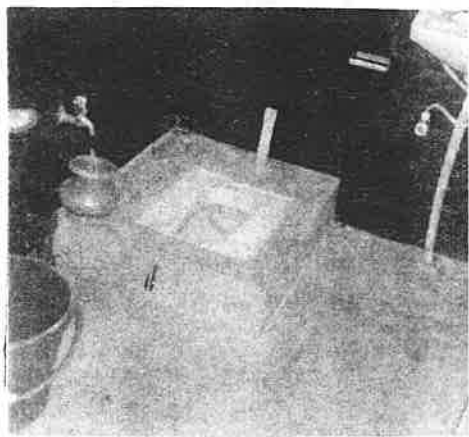


ベットには1つずつ蚊屋がついていて虫とかいを気にせずぐっすり寝れました。(ダニは少し苦労してサレ……。)

ベットもつかつかで寝心地抜群!!!

Wash Room

右の写真の部屋にはシャワーとトイレと洗面台がありました。シャワーは毎晩冷たい水で震えながらあびていました。それからお風呂では停電に備えて懐中電灯を常備!!! (停電の状態に入ることもしばしば。)



ベنگガル語 日常会話集

厳選10



1. অসসালামু অসসালামু অッサラムアライクム
নমস্কার / モシカレ
こんにちは (ムスリム以外)
こんにちは (ムスリム以外).
2. আমি ~ আমি ~
আমার নাম কি? アマナーナムキ?
私の名前は～です。
あなたのお名前は何?
3. ধন্যবাদ
ডনノバット
ありがとう
4. অভিবোধে নাই
オシエビダナイ
問題ない
5. ঠিক আছে
জী
テックアチェ?
ジ
分かります? / OK?
はい!
6. হাঙ্গো
モジャ
おいしい 
7. সুন্দর
シェンボール
すばらしい!
8. হ্যাঁ দ্যও
ハシダオ
笑って! 
9. আমার দেখা হবে
アバーレ デカホベ
また会いましょう!
10. তাতা
タタ
バイバイ 

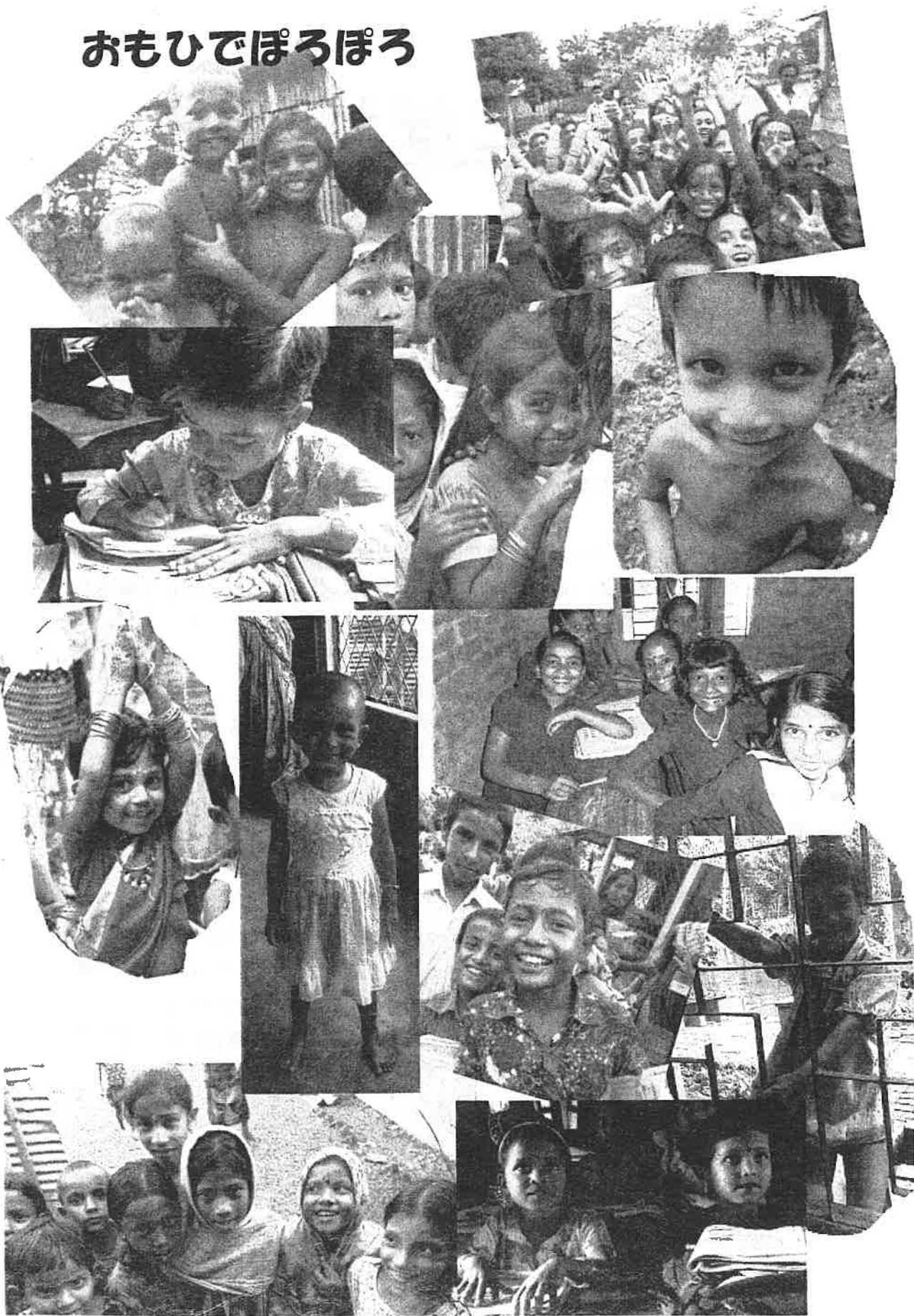
これであなたもベングルマスター 

★ S T こぼれ話 ★

- ◆ 夜中の 12 時ごろの飛行機に乗り、日本を出発！乗り換えのバンコク空港で 6 時間待ちました。食事をしたり、お買い物をしました。
- ◆ さあ！バングラデシュに到着！しかし私たちを待っていたのは 3 時間の入国審査待ち！ちょっとしたトラブル。“世界”を改めて感じました。
- ◆ ジャマルプールの B D P 施設に巨大なトカゲ（ヒガシベンガルオオトカゲ？）が侵入！まるでガラパゴスでした。
- ◆ ツアー中に 20 歳を迎えるメンバーがいて誕生日パーティーをしました！！なんと誕生日ケーキが登場！B D P スタッフさんからのプレゼントです。おいしかった！
- ◆ 農村でのそれぞれのチームの一週間。天気にも恵まれた B チーム in ネットロコナ。しかし、A チーム in カティラは雨が多く、そんなじめじめした気候からなのかダニが大量発生！！もうみんなすごかった！かゆい～！
- ◆ カチャモリスと呼ばれる唐辛子のような野菜は本当に辛い！男性陣がたくさん食べました。男らしかったです(笑)
- ◆ バングラデシュ流おもてなしなのか食事中「もうちょっと、もうちょっと…」とたくさんよそってくださいます。そのため食事後は本当に満腹です！
- ◆ A チームカーフェリーに乗った時。入ってきた車でグループの列がちぎれた！メンバーの一人が一瞬迷子に！！焦った！！
- ◆ B チーム。行きに左前のタイヤがパンクし帰り道、途中でタイヤ交換をしました。その間私たちはバングラデシュで中華料理店に入りタイ料理を食べました。(Chinese restaurantなのにトムヤムクンが出てきました♪)
- ◆ バングラデシュのお菓子の “sweet” と記してあるものがあります。が、嘘です。辛いです。まったく sweet じゃないです。でもおいしいです！
- ◆ バングラデシュの市場のあの交通渋滞のなかを駆け抜ける機会がありました。リキシャを手で止め、人をかき分け、車、バイクをかきわけ…危険を感じました笑
- ◆ カルチャーショーで私たちは「ふるさと」などを歌い、「マルマルモリモリ」、「女々しくて」を踊りました。大成功でした♪

大きな事故もなくとても楽しく、充実した 2 週間でした☆

おもひでぽろぽろ

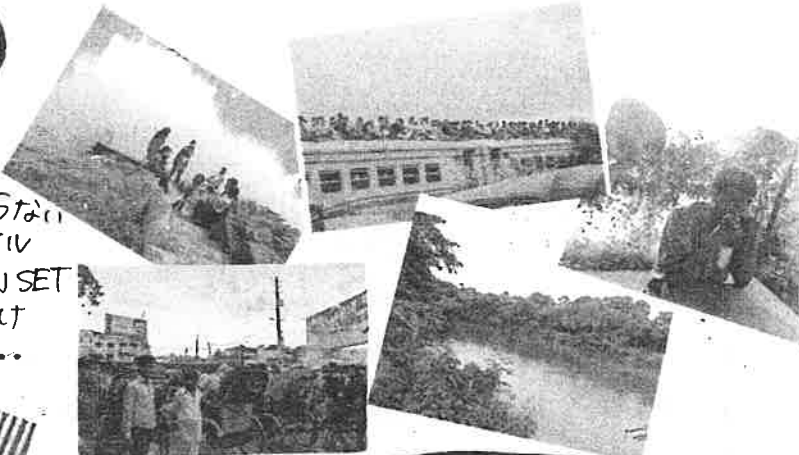


第45回ACEFスタディツアー日程表

date	time	activities	
8月14日	PM	羽田空港発	
8月15日	AM	タイ空港着、タイ空港発	
	PM	ダッカ空港着、プーバイルBDPオフィス着	
8月16日	AM	BDP活動についてオリエンテーション	
	PM	ガジプール市場に買い物	
8月17日		Aチーム	Bチーム
	AM	ポリシャール地区に移動	ネトロコナ地区に移動
8月18日	PM	村の家庭訪問	BDPオフィス到着
	AM	バプテスト教会の礼拝に出席	リキシャでBDPスクール訪問
8月19日	PM	BDPスタッフ宅訪問	川辺に夕日見学
	AM	BDPスクール訪問	船でBDPスクール訪問
8月20日	PM	ポリシャールの教会 & 学校訪問	BDPスクール訪問 & ボートクルーズ
	AM	BDPスクール訪問	BDPスクールで授業体験
8月21日	PM	市場へ	小舟でBDPスクール訪問
	AM	BDPスクール & BDPスタッフ宅訪問	徒歩でBDPスクール訪問
8月22日	PM	ボートトリップ	BDPスクール訪問
	AM	BDPスクール訪問	サリー着付け、メンディ体験
8月23日	PM	サリー着付け、メンディ、お別れパーティ	ピタ(お菓子)作り
	AM	各チーム、プーバイル地区に移動	
8月24日	PM	両チーム、プーバイルBDPオフィス着	
	AM	ダッカスラム地区BDPスクール訪問、ダッカ、アーロンにて買い物	
8月25日	PM	プーバイル、ミレル市場で買い物	
	AM	カトリック教会礼拝に出席、BDP職業訓練校訪問	
8月26日	PM	バシヤニエBDPスクールにてカルチャーショー	
	夜	ラップアップディスカッション & 音楽会	
8月27日	AM	閉会礼拝、プーバイルBDPオフィス発、ダッカ空港発	
	PM	タイ空港着、タイ空港発	
8月27日	AM	成田空港着	

Aug. 15 バングラデシュ到着!!

いろいろあったけれど、無事入国!!
どけどけ〜! とクラクションがあちこちから
聞こえてビックリ!! ぶつかりそうぞぶつからない
ハラハラスリルを楽しむと約30分、アバイル
オフィス到着! BDPスタッフの皆さんがSUN SET
をみせてくれると散歩に出かけ
ましたが...



Aug. 16

オリエンテーション
サロワカ買ったんさ♪

BDPスタッフの皆さんが、
オリエンテーションで日本とバングラデシュを比較しながら
分かりやすく色々な視点からのバングラデシュを考へて
くれました。またバングラソングも
また♪ 午後はサロワカシューズ
町へ出かけました。皆がわい

歌ってくれ
を買った
のが買って
良かったね! ♪

Aug. 17

Barisal と
Netrokona

Aug. 23

皆、集合!!

バングラデシュ
Netrokona

Barisal

Aug. 24

スラムの小学校
AARONG

Aug. 25

礼拝奉
職業訓練校へ

近隣のカトリック教会の
日曜礼拝に参加させてもらいました!

職業訓練校では、きっと同年代の子が
車の修理やパソコンを学んでいた。
カルチャーエクステンションでは素敵なダンス
や歌を私たちに見せてくれました。皆で
練習したゴールデンボンバー、とても
楽しかったね!

スラムの小学校に行くと言われて皆少しドキドキして
たが、そこはモデル校なだけあり私たちの想像とは
はるかに異なっていました。くつを外でぬぎ
ながら教室から出る子供共達の姿に感心しました。
大きな木の木の下で一緒に歌えて嬉しかった
です! アーロンは
別世界のようでした。

Aug. 26

バイバイ
バングラデシュ

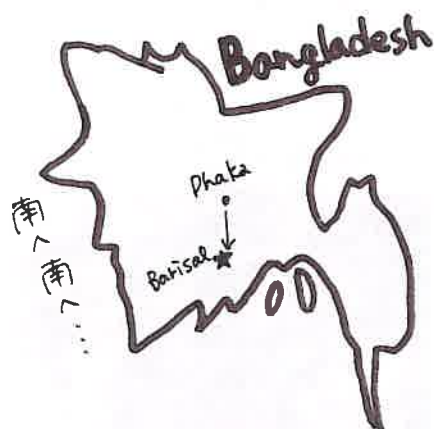


BARISAL

★ ボリッカル 地区 ★



AREA



8/17
↓
8/23

きょうこさん
とみさん
Team A
きょうこさん
みき

みき
みかけ
あか
めき
あんた

Kathira Diary



8/17

A, Bチームに別れて各地区へ移動!
Aチームはおよそ8時間かけてカティラの
BDP施設へ到着!!
到着後、リッレイ村から近くの村、
おうちへ訪問させてもらいました◎

着いた?!!!



8/18

日曜日なので教会へ。教会への道の途中に、
竹の一本橋が!!! きょうこさん、お怒りに...
これを渡ってたどり着いた先には、装飾がかわ
いい教会だ。ベンガル語の礼拝は新鮮だ
礼拝後には子供たちと遊びました。午後は
BDPスタッフのダニエルさんのお宅を訪問◎

ステキな奥さまと
ラッララした心



8/19

午前中はダンドーバ小学校へ。ぬるむ道を歩いて
行くと、子供たちがお出迎え! ものすごくカワイイ女の子の
ダンスにXOXOに...♡チャータビスケットをちやうとして
いただき、長老さんのような方が、泣きそうになりながら
祈って下さいました。その後子供と遊び、楽しみました◎
午後はボリッカルの中の教会を訪れ、その美しさにびっくり。
女子寮、男子寮を見たり、ルーシーさんという方にお会いしました!

女子寮です◎





8/20

真剣に勉強中。

生徒125名、先生4名の **ダンデルバレイバル** 小学校へ。新しく建て直した学校だそうです！
ゴロンゴ先生の楽しそうなかけ算授業に感動。家庭では歌を発表したり、質問をしたりしました。少年達の漫才？おもしろかった!!!
午後は市場へ。ヒンドゥー教の礼拝所を見ることができました。ニキルさん、マゴーキャンディとアップをおごてくれました♡♡♡ ドンノバード！

✿ 私たちにのために用意してくれた花 ✿

8/21

カティラどお世話話になっている、ビプリさん(BDPスタッフ)の奥さまが働いている、**リットチムリア** 小学校へ。
生徒174名、先生4名。保護者のお母さん方とお話することができました。その後の全校生徒による体操は生々！
ビプリマダムのきびきびした声、格好良かったので、午後は **ボートトリップ** へ ☺★ ビプリさん、ダニエルさん、ジョンさんが水かけをきたり、少年達のボートが接近してきたり... (笑) 天気もすられ、とても楽しかったです。



Q. 何をしている時が幸せですか？

A. 家族のために働いている時。



8/22

甘... ドイ 初体験

朝、近所の男の子たちとも交流！

Powerful 多うでむもしたわ。

8/23

カティラとの別れの日。

寂しぎて... **大号泣。**

大好きなカティラの子供たち、BDPスタッフさん、街行く人々。全この出会いに感謝!!!!
一生の宝物となったこの1週間を胸に、プーバイルへ...



朝、お茶タイムでベンガルヨーグルト **ドイ** をいただきます。その後 **バロツ** 小学校へ。生徒200名、先生5名。テスト日だったのに授業風景は見られませんでした。テスト後のバワ-全南の子供たちと遊びました！短時間の交流だったのが残念。000 午後は少しゆっくりした後、サリーの着付け、メニディ、ネイル、メイクもばっちり施してもらい、近所を子供たちと散歩。夜のカルチャーショーでは皆が歌い、踊り大盛り上がり！夜は横の建物の屋上で月、星、ホテルを見ました ☺★

----- **Kathira** 思い出 words -----

★カティラ電カ ★虫に刺されまくる事件

★めめモテモテ！ ★イマちゃん、じゅんちゃん

★「チャット、チャット」攻撃！ ★コウモリ、クモ

★ジョンさんの **たのい**♡♡♡♡

★乾かない流したくもの → ヘビデビッ...

★セクシー長老 ムンクの叶い子 → まかの **牧師** さん。



WE are TEAM B!

Netrokonia

ネトロコナ

নেত্রকোণা

Team B member 2*

ロビン(チームリーダー)、典子さん

実さん、拓也さん、ひとみ、みずき
なりみ、みは、まに

Yeah! ナディコ、ステファンさん



風が気持ちいい!
屋根のフェ
ーズ 廻す

この日はボートで
2校の小学校へ訪問しました。
午後に訪れた小学校では、子どもたちが
"こんにちは"を覚えていてくれて、とても驚き

ました。
そして、今日のティータイムは景色を眺めながらのチャーハとても
おいしかったです。他にもステファンの

華麗なダンス、子どもたちの外遊びなど、
盛りだくさん1日でした。

熱烈な
歓迎!

ドンパット!



7日に見送る。

朝8時半、Aチーム
と分かれてネトロコナへ。
運転手のステファンさんの
プロ技で、デコボコ道を
クリア。BDPオイスに
着いてお昼寝。外には
子どもたちがいっぱい
メンバーみいなど
遊びました。

Bチームの朝の始まりは
ラジオ体操。村人たちの
視線を受けながら行きました。

午前中はシムラティー小学校へ訪問。
行き帰りにはリキチャで移動しました。しかり
つかまっていたと、すぐに落ちそうでした。
夕方には宿舎に遊びに来た

子どもたちと一緒に
夕日を見に行き
ました。



20



ネトロコナに来て4日目。この日も2つの小学校へ。午前中はリキシャでの移動、午後は小工Eボートで対岸へ渡りました。このボート、水面スルスレ〜でスリリングでした。この小学校では、今までと異なり授業Eする側とは訪問しました。みんなど知恵を出合、て理解してもらる巧に頑張りました。

この回りの
突進中



21



ネトロコナで最後に訪れた小学校は、今までBOPオフィスに遊びに来ていた子EたちがたくEいました。一生懸命勉強する姿は、いつもの彼らとは違って見えて、なんEかとても感Eしました。夜はお料理E担当EしていたミナEんEたちのスペシャルDinnerに舌EうEみEまEしE。

22

おんEで、ハ
ンEーEラE

午前中、女性陣はバングラデシの伝統的な花嫁衣装サリーを着Eました。着E付E下EしたEのは、今まで訪問Eした学校の校長先生方。お忙しい中、ありがEうござEいました！男性Eも伝統的な花婿装に。午後はバングラのお菓子EタEりにE対E戦Eを“ピEタE”とEいE、EむEうEむEたいEにつEります。なEどEど、ネトロコナでE最後のE日をE暮Eしました。



レモンEフEーEどE
あEいEかEたEすE！



23

アEーEバEイルEへの移動日。出E発の時にはBOPスタッフEんEたEちE多くの子EもEんEたEちEが見送EてEくE別E。涙EをE流EすEのE程、この地Eで深く濃Eい思EいEがE生Eじた。おE世E話EにEおEにEすEべEのEに...ドンノバEット！！



見EようE見EまEえEどE！





バングラデシュに行って

感想文



「日本人の価値観ではなく…」

ACEF 井上儀子

ACEF スタディツアーのメンバーが日本に帰国した後、私は他団体のメンバーを受け入れるためバングラデシュに残りました。

BDP と ACEF は 22 年間の深い絆がありますので、ACEF スタディツアーには特に力を入れて、BDP スタッフ総出で心を込めてお世話をさせていただきます。一人一人のメンバーのことを気遣い、良い経験をしてほしい、良い出会いがあるように、バングラデシュを好きになってほしい、人生に変化をもたらすことができれば、いろいろな願い、そのために祈りを合わせています。それは毎回のことですが、今回「えっ？」と思うようなことを BDP スタッフより聞きました。BDP では、ACEF をきっかけに知り合った様々な日本人を今まで受け入れて来ましたが、ACEF スタディツアーメンバーは他のグループの日本人と違うというのです。

それは何なのでしょう？ まず ACEF スタディツアーメンバーは礼儀正しいと言われました。生活習慣も、食習慣も、行動も、日本とバングラデシュは違うのに、ベンガル人のスタイルに合わせて、ベンガル人のように振舞おうとしてくれる。それは日本人の価値観を通すのではなく、まずバングラデシュを理解しようとしてくれていることがよくわかる、というのです。

スタディツアー準備会の時に、手で食べること、トイレに紙はなく水で処理することなどを聞くと、驚きのあまり期待より不安がどんどん増えていきます。日本のように水が当たり前のように蛇口から出てくるわけではなく、井戸の水汲みが必要なこと、電気は当たり前のようにつくのではなく、すぐに停電してしまうこと、いろいろな虫がいて、虫除けをしていても刺されてしまうこと、そんなことにドキドキしながら、バングラデシュに到着したことでしょう。それでも、初めての経験にワクワクしながら挑戦し、子どもたちとの触れ合いが楽しくて、毎日食卓に並ぶご馳走も美味しくいただき、BDP スタッフの言うことをちゃんと聞いて、笑って泣いて、歌って踊って、そんな姿を見るのが BDP スタッフは嬉しいようです。

また、何よりも ACEF スタディツアーメンバーには、スピリチュアルなものをを感じるというのです。朝晩の礼拝、またシェアリングにより、困った問題を分かち合う中で、自分の心を話す、人の意見を聴く、神の言葉に聴くということが、自然になされているのでしょう。これはとても大事なことで、ACEF スタディツアーの一番の特徴だと思います。その結果、メンバーの一人ひとりが、気がつかないうちに精神的にも物理的にも礼儀正しくなるのではないかと思わされました。

今回はツアー前にダッカに到着していたので、スタディツアーを迎える前に BDP スタッフが真剣に祈り合う姿、スタディツアー後には BDP スタッフの感想を聞くことができて、今まで続けてきた ACEF スタディツアーに誇りを感じました。

第 45 回 ACEF スタディツアー

前田 恭子

2013 年 8 月 14 日午後 10 時、羽田空港国際線ロビーに集合したメンバーと、見送りに来られた保護者の方々の表情を見て、いつもとは違う緊張感を覚えました。

バングラデシュの政情が不安定なため、デモやストライキのことが、今までに無く日本でも報道された中、BDP のマラカール氏の言葉や、今までの経験から大丈夫と判断しての実施ではありましたが、メンバーの、特に高校生の皆さんを送り出す決心をしてくださった保護者の方々のお気持ちを考え、身の引き締まる思いでした。

準備会で説明を聞いたとは言っても、実際に便利すぎる日本から行くと、バングラデシュはあまりに違います。メンバーはどのように受け止めるのだろうか、バングラデシュを好きになってくれるだろうか、ツアーリーダーをお願いした吉村先生は、とても気さくな方とお見受けしましたが、バングラデシュの田舎での生活は大丈夫だろうか、等不安の種は尽きません。でも、神様はちゃんと全て良いように計らってくださいました。

ダッカ空港到着後、イミグレーションで 3 時間かかり、喧騒と埃の中を車に揺られてプーバイルまで行く間、驚きながらも好奇心いっぱいなメンバーは不平も言わず、又、プーバイルでの日本とは大分違う生活様式にもすぐに慣れ、元気いっぱいでした。二日目のオリエンテーションで、日本とバングラデシュの数値的な豊かさの違いを知り、その分自分たちは幸せなのかとまじめに考え込み、滞在中常にそれを心に置いて生活をしていたメンバーとの毎夜のシェアリングは、私にとってとても嬉しい時間でした。

カティラに行った A チームに同行した私は、吉岡先生と同室で、色々とお話しをさせていただき、楽しく且つ学びの多い毎日でした。メンバーが順番に受け持って話してくれる朝祷・晩祷では、思いがけない一面が見られたり、深く考える彼女たちの話に耳を傾ける時間は恵みに満ちたものでした。

ダニに咬まれ辛い思いをしながらも、カティラが大好き、バングラデシュが大好きと言うメンバーの柔らかな心を嬉しく思います。滞在中の様々なシーンで、BDP の方たちが守ってくださったから、安心して行く先々で行動できました。そして、それをきちんと感謝できるメンバー達。毎夜の祈りの中では、必ず B チームのこと、日本で心配してくださっている家族のこと、そして BDP の方々や小学校の子どもたちのことを祈っていました。

スタディツアー同行は 5 回目でしたが、単に珍しい土地に行って、珍しいことに驚いただけに留まらず、バングラデシュの子どもたちとの関わりに心を置き、自分に何が出来るだろうと真剣に考えてくれている彼ら・彼女たちと一緒に行くことができた今年のスタディツアーも、私にとって新しく与えられた宝物と思います。

今年バングラデシュに行くことができて良かったと思っています。「スタディツアーのチームリーダーをやりませんか」とのお話をいただいた時に、「えっ今年？私が？」との思いがありました。勤務している青山学院女子短期大学の学生が今までスタディツアーでたくさんの学びと体験をしてきたことは聞いていましたし、マラカルさんには毎年青短に来ていただいてお話をしていただいていたので、「いつかは私も参加してみたいな」との気持ちはぼんやりあったのですが、今年の夏は特に短大の東日本大震災被災地ボランティア活動や色々な修養会や研修会への出張が立て続けの過密スケジュール、7月半ばから一日も休み無く「タッチ&ゴー」のままバングラデシュへ突入という状況でしたので、十分な準備も出来ないなと思いつつ、これも神さまが下さったチャンスだと思い、思い切って飛び込んだと言うのが正直なところ。結果、愉快で元気なすてきなチームメンバーと一緒に、すばらしい2週間を過ごす事が出来ました。祈りをもって私たちを迎えてくださったBDPの方々、良い機会を与えて下さったACEFの皆さんに心から感謝しています。

入国審査になぜか3時間もかかる一苦勞の末降り立ったダッカはあふれる人と喧騒の街、バスの上にも、列車の上にも人が溢れ、車はプレーキ代わりにクラクションを鳴らして突進し、渋滞の車の間を物売りの人々が縫うようにして窓から声をかけると言う具合で、さすが人口密度世界一と言われる国だとまず圧倒されました。「スーパードライバー」ニキルさんの「弾丸テクニック」でカティラに向かう長い道中も切れ目無くお店やお家が並び、朝昼晩何時でも何処でも人々がいる、生活していると言うのが、人の姿をあまり見かけない日本の地方の様子と比べて印象的でした。

さらに印象的だったのは女性の活躍です。首相と第一野党のトップが女性であるということだけでなく、訪れた学校では女性の先生方がほとんどで(女性の教員採用がBDPの方針だそうです)、その先生方が実に生き活きと活躍しておられること、また、すてきなBDPスタッフにはパワフルなお連れ合いがそろっておられ、家族ぐるみで教育活動を支えておられること、また学校で「ガールズトーク?」「井戸端会議?」をしたお母さん方のエネルギー、かわいくてすごい踊りを披露してくれた女の子、そして現地でこれから約2年働かれるJICAのさやかさんも含めて、多くの魅力的な女性たちと出会えたことがうれしかったです。

すてきな女性たちと言えば、今回のメンバーです。19人中17人が女性、中心は高校生でした。高校、大学の夏休みの貴重な2週間をバングラデシュで過ごす決心をして集まってきた彼女達ひとりひとりが本当に積極的で、フレンドリーで、思いやりに満ちたガールズたちでした。(もちろん、拓也くんも実くんもいけてたよー!) カティラで共に生活したAチームの仲間たち、楽しかったね。好きあらばおかわりが投入される「わんこカレー」のサービスにおびえながらも「モジャ！」連発のお食事、ドロドロ道を転びながら訪ねた小学校での子どもたちの大歓迎、私がやけになって?「カティラ電力の歌」を作るきっかけとなった「名物」停電、そして歌って踊っての最後の夜などなど、楽しい思い出に満ちた一週間は、もちろん様々な課題を問われながらもとても幸せな日々でした。カティラに別れを告げる時、皆が泣いていたのをはじめ「最近の若いモンはよく泣くね」と笑っていましたが、気付くと私も泣いていました。鬼の眼にも涙?—出会いの喜びに感謝する涙だったのかなと今思います。

参加したひとりひとりがこの喜びをひと夏の思い出に終わらせることなく、ずっとバングラデシュの友達とつながり続けていくことが出来ますようにと祈っています。もちろん私も。

Fifty Times More of Almost Everything Robyn Anderson

Fifty times more – that's how much Japan has compared to Bangladesh. Japan has fifty times more paved roads, more oil consumption, more electricity consumption, more money, more of almost any material, measurable goods than Bangladesh. "But, do Japanese people have fifty times more happiness?" That was the question Albert Malakar of BDP presented to us at our orientation lecture. As part of Team B on the 45th ACEF Study Tour to Bangladesh, I considered his question while spending about a week in the rural town of Netrokona. In Netrokona, green rice sprouts in watery fields spread into the distance in every direction. Cows and goats were tied to stakes beside rough dirt roads, occasionally wandering into and blocking traffic. People stared as we approached, but when we smiled and waved, they smiled and waved back. Swarms of neighborhood children surrounded us when we walked down the road. Their little hands unhesitatingly locked with ours. They gathered outside the BDP office every day to play with us. They called us by name. They brought us flowers. Through my time in Netrokona, I saw that Bangladesh is overflowing with energy, generosity, and smiles. Japan possesses many things in much greater quantities than Bangladesh, but happiness isn't one of them.

Our main activity each day was visiting BDP schools in the Netrokona area. The buildings were small. There were few colorful pictures or objects on the walls. Some classrooms had dirt floors. There were no fans or air conditioning. The chalkboard was less than half the size of chalkboards in my classrooms. The students sat at narrow tables on narrow, crowded benches or on the floor. The textbooks were old and worn. There were so many things that the BDP schools didn't have. But there were two important things that they did have: 1) dedicated, no-nonsense teachers instructing their students and 2) a chorus of powerful young voices enthusiastically repeating their lessons, memorizing information, and answering questions. Despite the schools' plain appearance, joy from learning burns vividly in their children's eyes.

When we weren't at school, we lived at the BDP office and did our best to adjust to a new lifestyle. In Japan, I wash my clothes in a machine. I frequently buy ready-made food at a restaurant or a convenience store. Unlimited water is just one simple twist of a knob away. Toilets flush. In Netrokona, we had none of those things. Knowing that we came from a very different culture, the BDP staff went to great lengths to care for us. Every day, they prepared three delicious, filling meals; pumped and hauled water to fill huge barrels in our bathrooms so that we could use the toilet and shower; and so much more. In Netrokona, things I usually considered simple – washing clothes, taking a shower, eating – were great undertakings. There wasn't much we could accomplish as individuals. Every day, we relied on each other and the BDP staff. By cooperating and sharing, we built and reinforced bonds of love. Those bonds will stay with me for the rest of my life.

In Japan, we have seemingly unlimited resources. Assisted by technology, each individual can accomplish so much. In Bangladesh, people are limited by their access to resources and technology, but the power of their hearts is unlimited. Generosity, cooperation, enthusiasm, dedication, love – these bond us together as a community, and our community is our greatest source of happiness.

「波打ち際のヒトデの話」

共愛学園中学校・高等学校教員 永野拓也

ある時、美しい海岸を歩いていた。しかし、そこには無数のヒトデが打ち上げられていた。よく見ると、そのヒトデを一匹ずつ海に返す男の姿が見えた。しばらくして、その男に「何故そんなことをしているのか。」と質問した。何故ならば、ヒトデの数は膨大であり、男の行為は無駄に思えたからだ。すると、彼は答えた。「少なくともこのヒトデにとっては意味があることさ。」

バングラデシュでの初めての学校訪問を終えた後、私はディコと二人で歩いて宿泊先まで帰ることにした。その道中私はディコと様々なことを会話した。バングラデシュのことや日本のこと。自分の仕事のことや、自分達の街のこと。その時間の中でディコが突然話始めたのが、「波打ち際のヒトデ」の話であった。後にアルバートもこの話をしていたので、BDPのスタッフの中では有名な話なのかもしれないが、ディコから話を聞いた時、何とも言い難い気持ちになったのを覚えている。何故ならば、彼らがバングラデシュという国の中で、情熱を持って子どもたちの為に教育を受けさせようとしていることが感じられたからである。また、同時に私自身もとても勇気づけられたからであった。

今学校訪問の時のことを思い出すと、私の頭の中に浮かぶのは、大きな声で返事をする生徒と、その様子を教室の外から眺める様々な年代の人々の様子である。そこには、勉強をすること自体に対する熱気のようなものが存在していた。しかしながら、日本と大きく異なる点は、彼らの多くが中学や高校に進学しない可能性がある点だ。幼くして家族の為に働く者もいれば、結婚する者もいる。そんな彼らに対して、BDPの人々はどんな感情をもっているのだろうか。きっと、彼らも複雑な感情を抱えながら、それでも「波打ち際のヒトデ」の話のように、小さな小さな力を注ぎ続けているのだろう。

そんなことを考えていると、私はバングラデシュで、自分自身と向き合うこととなった。私は普段の生活の中で、一人一人の可能性を信じられているだろうか。私の置かれた状況の中で、誠実に生活できているだろうか。私がバングラデシュで見た街の風景や流れる時間、生活スタイルなど多くの点で日本とは異なっていた。しかしながら、その根底にあるものは、変わらないと気づかされたのである。BDPの人々を通して出会ったバングラデシュの子どもたち。彼らが今後どのような人生を歩むのかは、誰にも分からない。けれど、大切なのは彼らの人生にとって、BDPのスクールで学ぶ場所が意味のある場であると信じていることなのだと思う。それは、バングラデシュだけではなく、日本でも同じことなのではないだろうか。私に今できることは、目の前にいる人々の可能性を信じていること。そして、微力かもしれないが、自分の持っている力を誠実に注いでいくことなのだと思う。

最後になりますが、このスタディーツアーを企画して下さった ACEF の方々、そして BDP のスタッフの方々、約2週間一緒に生活を送ったメンバーのみんなに感謝したいと思います。ありがとうございました。

「スラム街を訪ねて」

同志社大学 木谷 実

バングラデシュから帰国して数週間が過ぎました。ダッカの道路事情に受けたカルチャーショック、美味しい食べ物、学校を訪問したことなど、そのどれもが貴重な体験でした。中でも私が考えさせられたのは、スラム街とその地域にある学校を訪問した時のことです。私はそこでカメラを構え写真を撮っていました。そんな私に学校の先生は「ここでは写真を撮らないで下さい」と言いました。なぜそこでは、写真を撮ってはいけなかったのでしょうか。それは、そこで生活している人たちがいるからです。私たちは学校や建物を見学しにいったのではなく、生活の場を訪ねさせてもらったのです。もし私たちが自分の家に土足で上がり込まれ、無許可で写真を撮られたらどんな気持ちになるでしょう。それを忘れていました。私は「夜まわり」という野宿者の支援活動を京都で行っています。その活動には様々な方が参加され、中には取材のために写真を撮りたいという方もおられます。しかし、私はそれをお断りしています。野宿している人たちにとってはその場所が家であり、それは私たちの住む家と一緒にだからです。日本ではこのような意識を持っているのに、バングラデシュで私はそれに気付くませんでした。日本とバングラデシュは文化、宗教など様々な面で多くの違いがあります。しかし、バングラデシュに住んでいる人たちは、私たちと同じ人間です。外国人の被写体としてそこにいるのではなく、そこで生きているのです。バングラデシュに行き、私はそのことを気付かされました。日本から離れた国で、日本での人との関わりを再確認したのです。今までの日本での歩みと、これからの歩み。このツアーに参加しその両方を考える経験を、私はバングラデシュの人々から貰うことが出来ました。

日本に帰ってきてから見る子どもたちの姿。ピカピカの浮き輪をおなかにはめたまま、綺麗な服と帽子とサンダルを身に着け、片手はお母さんと繋ぎ、もう片手にはアイスを持って楽しそうにプールから帰る小学校 1 年生くらいの男の子。当たり前の光景だったが、バングラデシュから帰ってきた今、これが世界ではほんの一部のとんでもなく恵まれた子たちなのだと実感する。日本という国に生まれることと、バングラデシュという国に生まれること。それだけの違いなのに、その違いが子供達にもたらす影響はこんなにも大きいのかと思わされる。

今回のスタディーツアーの中で最も印象的であったことに、BDP スタッフさんの言葉がある。

「皆さんがこうしてスタディーツアーとして来て下さることで、BDP 小学校の子供達は自分を支援してくれている人々がいるのだと実感することができる。また、そのような人々と会えることを楽しみにしているので、学校への出席率が実際に良くなっている。」

私は一昨年カンボジアに訪れ、そこでも今回と同じように農村の小学校を訪ねたり、そこに通う女の子の家を家庭訪問した。しかし、遊んでいる時は本当に楽しそうな子供達も、すぐに来てしまう別れの時にはとても悲しそうな顔をしていた。その顔を見た時から、私の中で“スタディーツアーに参加すること”が相手国の子供にとって何の意味があるのかという疑問が生まれた。スタディーツアーとはせいぜい 1~2 週間という短期間である。その短期間、参加する私たちは多様な経験をし多くのものを学び得ることができる。しかし、子供達にとっては、たった一瞬の楽しみとその後の別れ、その繰り返しではないかと思ったのである。途上国支援に重要なのは“継続”であると言われる中で、スタツアが持つ意味とは何か。自己満足の旅になってしまうのではないか。そのような疑問と葛藤を抱きつつ、今回私はバングラデシュに足を踏み入れることとなったのである。

行く先々で出会う子供たちは、皆本当にかわいかった。純粋な瞳でじっと見つめてくる彼らと心から楽しんで交流したいと思いつつも、なかなかそうできなかったのは、やはり“この関係が一瞬であることで、子供達が悲しい思いをするのではないか”という思いがあったからである。しかし、そのような思いは、前述した BDP スタッフさんの言葉で打ち砕かれた。この一瞬に、意味がある。たった二週間、私がこの場にいて、子供達と関わることには大きな意味がある。そう気づかされた時から、私は出会う子供たち一人一人との交わりに全力を注ぐことができるようになった。この瞬間の思い出が、この子供の学校へ通うモチベーションに繋がるかもしれない。そんな思いで子供達とのコミュニケーションをとるようになった。

プーパイルに約一週間、カティラに約一週間滞在する中で訪れた 5 つの BDP 小学校。そこで教える先生方の姿に感銘を受け、また学ぶ子供達の熱意にとても励まされた。電気がなくても、スラムの中であろうと、子供達は楽しそうに授業に参加していた。この子供達の中で、今後ドロップアウトしてしまう子供が幾人もいるのだと思うととてもやるせない気持ちになった。それと共に、この子供達の未来への選択肢を少しでも増やす働きがしたい、と強く思わされた。

スタディーツアーに参加し、帰国してから 1 週間。出会った 1 人 1 人の事を思い出しながら、今後どのような進路決定をしていくか模索している。今回の経験、子供達や BDP スタッフやスタツアメンバーとの出会いを“大学 3 年生の夏休みの思い出”として終わらせるのではなく、これからの歩みに繋げるものとしていきたいと思う。思いを、行動へ。

最後に、素晴らしい二週間を与えて下さった主に感謝して。

感想文

李相珉(イサンミン)

バングラデシュは自分にとって親しくない国の中で一つでした。バングラデシュという名称とバングラデシュは貧しい国であるということしか知らなかったです。バングラデシュに対しては全然知らなかったです。最初にスタディーツアーに参加したいと言った時も周りの人々たちから危ないから「やめてほしい」とか「何でいくの」とかなどバングラデシュに対して不安な話ばかりでした。それで少し緊張していたのは事実です。しかし、直接バングラデシュに行って自分が経験したバングラデシュは自分が想像した国のイメージではなかったです。たとえ貧しくて大変な生活をしている人々であるけれどもバングラデシュ人は全てが純粋な人々でした。

小学校に訪問して子供たちと遊んだ時、シャボン玉やバルーンだけでも楽しく遊んでいる子供たちの笑顔は自分の心まで癒される気持ちになりました。自分は21歳になりましたが実は今も子供のように遊び回りたいです。しかし周りの人々から大人であるから大人は大人らしく行動しなければならないという話を聞いてます。その話を聞くたびに、寂しい気がします。それで、バングラデシュで子供たち皆と一緒に遊ぶことができて、自分は本当に嬉しかったです。また、自分と一緒に遊んでいた子供たちの顔も本当に嬉しく見えて自分がこの子供たちの笑顔をいつまでも守ってあげたいと思いました。学校で会った子供たちだけではなく、寮の前に毎日来てくれた子供たちの笑顔も忘れられないです。寮の前に遊びに来てニコニコ笑いながら自分たちの名前呼んでくれた子供たちの姿は今も生き生きしています。こういう愛らしいバングラデシュの子供たちが学校で一生懸命勉強しても結局大学に進学できる人数は極めて少数である現実にはバングラデシュが無知だと感じて切なかったです。

人々の成功を左右するのは知識です。いくら力が強い人でも無知だとその人はその以上は発展できません。しかし、力は弱くても豊かな知識を持っていると成長ができます。スタディーツアーに参加したから感じたのはバングラデシュの子供たちには熱情があります。また頭がいい子供も沢山います。しかし、まだ国からの援助は弱いのです。最近では田舎の女性たちに色々な勉強の機会が提供されていると言われましたけれども、国の発展のためには今より何倍以上の力を教育のほうに注がなければならないと思いました。勉強する時に輝いている目で先生を見つめていた子供たちの姿はきっとバングラデシュを明るい未来に導けることと思います。

自分が何よりこのスタディーツアーに参加して一番感謝しているのはいい人々との出会いです。いい人々たちの出会いのおかげで自分の夢も確かになりました。バングラデシュという国にはまってしまいました。純粋なバングラデシュ人が好きで、バングラデシュ人ともっと交流したいです。可愛い子供だけではなくて、優しい大人たちと一緒にいると自分も幸せになりました。将来にバングラデシュの人々と関連があるところで仕事したいです。それでいつまでもバングラデシュの人々の純粋な笑顔が維持されるようにしたいです。

またスタディーツアーと一緒に参加した全ての人々との出会いにも感謝します。我々が会ったのは偶然ではなくて、絆であると思います。スタディーツアーで会った全ての人々皆ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。春休みも絶対参加したいです。^^

子どもたちのまぶしい笑顔。どうしてこんなにも輝いた笑顔をしているのか…。

最初に大学の掲示板で、ACEF のスタディツアーのポスターを見たときに私が考えたことだ。そのポスターにはバングラデシュの小学生の写真1つと、スタディツアーの概略が載っていた。一目見て、その写真が忘れられなかった。私の中でバングラデシュは、アジアの中でも最貧国とされているという知識があったからだ。なぜ貧しいはずの子どもたちが、こんなにも楽しそうな顔をしているのか。その時点での私には理解ができなかった。その日から数日経っても、彼らの笑顔は私の脳裏に居続けた。どうしても忘れられなかった。さらに、その笑顔の理由を知りたくなった。そして、ポスターを見つけた時から1か月後、ついに私はスタディツアーに参加することを決意したのである。

バングラデシュに滞在している間に、私はとてもたくさん子どもたちと話し、遊び、ふれ合った。主に、訪問した学校先、そして宿泊先の BDP オフィスで子どもたちにアプローチできた。ネトロコナでは7つの小学校を訪問したが、どのクラスでも生徒たちは真剣だった。珍しい私たちが教室に入ったことで多少おしゃべりや注意散漫さが目立ったが、それ以外では真面目に教科書の詩を暗唱したり、ノートにかけ算を書いたりしていた。訪問した学校には、煉瓦の校舎で机や椅子がある比較的整った校舎もあれば、トタンの小屋で地べたに麻を引いただけの簡素な校舎もあった。しかし、環境が異なっても子どもたちは同じように勉強に取り組み、学ぼうとしていた。彼らの一生懸命な姿に、私はしばしば心を打たれて感無量になった。けれども、農村にいたときはまだ笑顔の理由が見つけ出せなかった。BDP オフィスに毎日足を運んでくる子どもたちを遊んでも、やはり分からなかった。貧しさと子どもたちの笑顔のつながりは何か。寂然としないまま、農村からプーバイルへと帰っていった。

答えが浮かび上がったのは、バングラデシュに来て10日目のことであった。この日の午前中、私たちはダッカにあるスラム街の小学校を訪ねた。授業見学し出し物をしたあと、生徒の1年生のモリオンちゃんの家にお邪魔した。一通り家族構成などを伺ったあと、典子さんが「学校は楽しい？」と彼女に質問した。そうすると、モリオンちゃんはにこっと笑って「楽しい。」と眩き、学校の話をし始めた。このやりとりを見て、ようやく私は理解することができた。貧しい環境にある子どもたちから笑顔をつくりだすためには、学校が必要であることを。つまり、貧しさと笑顔は「学校」を接点に結びついていたのである。ここに私は、学校教育の大切さを見出すことができた。

バングラデシュは、まだ様々な問題を山積みにして発展を遂げているように感じられる。例えば、街中の交通規制の無さ、打ち捨てられた大量のゴミ、広がる貧富の差などがある。将来、子どもたちの大きな瞳には、どのようなバングラデシュが映っているのだろうか。そして笑顔を生む教育は、発展して絶えず続いているのだろうか。彼らの瞳に映るバングラデシュが、今よりもさらに豊かであることを、私は祈りたい。

「新たな気づきと出会い」

見供 瞳

「帰ってきた…」バングラデシュの空港に着き車内からダッカの街並を見ながら私はそう思った。こう感じた背景には、三年前に初めてこの ACEF スタディーツアーに参加したことが影響していたのだろう。久しぶりに来たバングラデシュは、変化があるところもあれば、前とあまり変わらないところもあった。今回のスタディーツアーは前回と比較をしながら物事を見ることができたように思う。今回私が再び参加しようと思った理由は、前は様々なカルチャーショックを受け、沢山の物事を後から追いかけることを感じ取ることしかできなかった。今回は物事を追うばかりでなく、三年前とは違う目線で自分にこれから何ができるのかということを考えてくれたため参加を決めた。またこの三年間バングラデシュのことを忘れられず、子供たちの笑顔や人々のあたたかさを再び見て感じたかったからだ。

今回のスタディーツアーも、沢山の出会い・笑顔・貴重な学びに恵まれたものだった。ネトロコナ地区に行くのは初めてでどんなところなのかも分からず、多少の不安もあったものの、充実し濃い時間を過ごせた。この地区では7つの学校を訪れたが、どの学校の生徒も皆明るく笑顔と瞳がキラキラしていた。そして、沢山の学校を訪れシェアリングをする中で、典子さんから学校再建までの道のりを初めて詳しく聞いたことが私の中に強く残っている。学校を建てる時、この地域に本当に学校が必要かを知るために青空教室からはじめ仮設の学校を村人が作り壊れたら直し、段階を経て後に村人たちが協力し合いきちんとした煉瓦づくりの学校を建てることを知った。日本人の寄付や援助だけで建ててしまうと建物に愛着が湧かず後の援助にも頼ってしまうことを避けるためでもある。バングラデシュのことを愛し、真にこの先のことを考えているからこそこのような経緯を辿っているのだというように感じた。教育は、人間が成長する上でとても重要なことで、いい教育を受けることが今後の未来を担っていくように強く感じた。それを物語っているのは学校に通う子供たちの輝く笑顔やひたむきな姿だと思う。

また、沢山のひととの出会いを通じて、本当の豊かさとは何なのかということも考えさせられた。わたしは人間にとって本当に必要なのは心の豊かさだと思う。そして、日本とバングラデシュの差を統計的に表している50倍の幸せの差はほとんど感じなかった。人間にとって物質的な豊かさがある方が暮らしやすいのかもしれない。しかし、心が豊かであれば元も功もない気がする。三年前もこのことについて書かせてもらったが、今の私には曖昧な答えしか出せない。しかし、これからの経験や出会いの中で深く考えていくことができたらいと思う。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった周りの方々をはじめサポートをしてくれたBDPスタッフに心から感謝したい。

Thanks for all. I am sure that I will go back to Bangladesh in five years. I am looking forward to seeing you again.

感謝することの大切さ

東洋英和女学院高等部3年 田中 希実

このスタディーツアーを通して私はたくさんのことを学び、経験することができました。

Aチームの礼拝でも少しお話しましたが、日本にいと恵まれた環境にいるはずなのに小さなことに不満を言って感謝することを忘れがちです。バングラデシュで子どもたちがどんなに悪い環境の中でも、学校で一生懸命先生の話聞いて楽しそうに勉強をしているのを見た時、生徒のお家を訪問した時に幸せそうに生活しているのを見たら、自分の不満は小さいものであることに気付かされました。毎日あたりまえに過ごしている日本での生活は本当に感謝すべきものなのだと思います。

この2週間で一番使った言葉はありがたいの意味のドンノバットだと思います。慣れないことばかりでたくさんの人達に助けられて生活した2週間だったので、日本にいる時よりありがたいと言った気がします。私達がドンノバットと言った時に嬉しそうにするバングラデシュの人達の笑顔は本当に素敵でした。そして日本でもあたりまえのこととして過ごしているたくさんの方にもありがたいの気持ちを表したいと改めて思いました。

1台のバイクに4人も乗っていたこと、カティラに行く途中のフェリーで迷子になってしまったこと、「チョット、チョット」と言ってビプルさんがたくさんおかわりを入れてくれたこと、ここでは書ききれない想像もつかないような経験ばかりで衝撃も大きかったけれど、その全てが私の心に一生残る思い出となりました。この貴重な経験は私のこれからの人生を変えるものとなりました。支えてくださったBDPスタッフのみなさん、ACEFスタッフのみなさん、一緒に過ごした大好きなツアーメンバー、このツアーに送り出して無事を祈ってくれていた家族、全てを計画し守り導いてくださった神様、関わってくださった全ての方に感謝します。

ドンノバット！！！！

スタディツアーに参加して

東洋英和女学院高等部 3 年 土屋美奈

バングラデシュは暑いし、ゴミが町中に溢れていて汚かったし臭かった。交通規制がなくて町中クラクションの音でうるさくてすごく危ない。ご飯は毎日毎食カレー。シャワーは水しか出ないし、ネトロコナにはシャワーも無くていちいちバケツに水をくんで上から流す作業の繰り返し、トイレも紙を使えないから手で洗うし、停電なんて当たり前。そんな生活を2週間体験してきました。日本で当たり前だと思っていた生活は当たり前なんかじゃなくて、すべてに感謝しなければいけない事だと気付かされました。いままでの私は、毎食違うご飯を食べることが出来て、シャワーからはお湯が出て、お風呂に浸かる事が出来て、トイレに紙を流す事が出来て、停電など一切無くて常に冷房が効いていて、毎日学校に通えている事などに感謝する事もせず、小さい出来事にイライラしたり悩んだり、どれだけ自分が小さい人間だったかと恥ずかしくなりました。

バングラデシュの人は大人も子どもも本当に温かい人ばかりでした。アルバートさんが私たちに日本はバングラデシュより50倍豊かですが、それならバングラデシュは日本より50倍不幸せなのではないかと問いかけていました。でも私はこのスタディツアーでそんなことを1ミリも感じませんでした。このツアーでは子どものキラキラした笑顔や真剣に勉強に取り組む姿をたくさん見る事が出来たし、素敵な出会いがたくさんありました。バングラデシュの子どもたちは日本の子どもたちより純粋で素直だと思います。明るくて元気で活発でそんな子ども達にパワーを貰えたと、とにかくそんな子ども達が私は大好きです。それにこのツアーを支えてくださったBDPのスタッフのみなさんが本当に素敵な人ばかりで笑いの絶えない時間でした。一緒にツアーに参加したみんなと出会えた事にも本当に感謝しています。バングラデシュスタディツアーで経験したすべてこととたくさんの素敵な出会いを一生忘れずに、これからはこの経験をたくさんの人に伝えてみんなに興味を持ってもらえるように頑張りたいと思います。そしていつかまたバングラデシュに帰りたいと心から思っています。みんなだいすき、ありがとうアバーラデカホベ

バングラデシュと日本

共愛学園高等学校 2 年 志倉也美

私がなぜ、このツアーに参加しようとしたのか。きっと参加した他のメンバーの方々は明確な目的をもちこのツアーに参加を決めた方がほとんどだっただろうと思います。私が参加した理由、それはただ単純にバングラデシュという国に行ってみたい。それが理由でした。なかなか個人では行こうと思わない国だと私は思っていたのでいい機会だと思ったのです。

そんな単純な目的でバングラデシュに飛び立った私は、現地についてから毎日が驚きと学びの日々でした。トイレは水洗ではないし、お風呂も水が出てくるシャワーのみ。ネトロコナでの宿舎ではシャワーすらなく、桶で水をすくって浴びるものでした。この時点で日本での生活のありがたさを感じました。

ネトロコナでの生活は大変なこともありましたが、とても充実したものでした。なによりネトロコナの子供達のことは今でも私の名前を呼ぶ声が聞こえてくるのではないかと思います。日本からきた見ず知らずの私の名前を覚えてくれて、手を繋いでくれて、たくさん話しかけてくれました。なにより子供達の笑顔は、最も頭に焼き付いた記憶です。楽しいことばかりで、毎日子供達が宿舎まで遊びに来てくれるのが嬉しかったです。

ですが、楽しく充実した日々の中にも困ったことが2つありました。一つ目にあったのは言葉の壁です。子供達は笑顔で駆け寄り、たくさん話しかけてくれたのですが、ベンガル語で話しかけてくれる子供達の言っていることはほぼ理解できませんでした。ジェスチャーを交えて話してくれる子ならやっとのことで伝わるほどでした。なかには学校で習った簡単な英語を使ってくれる子供もいましたが、やはり大半はベンガル語なので聞き取れません。その時私は、とても心苦しかったです。何を伝えたいのかがわからなくて、子供があきらめたように悲しそうな表情を浮かべたこともありました。私は「ごめんね。」と日本語で返すことしかできませんでした。その「ごめんね。」でさえも子供達に伝わっていたのか定かではありません。言葉が通じなくて意思の疎通をとるのはたしかに難しいと思いましたが、同時に言葉が通じなくてもあれほど楽しい時間を共に過ごせることにも気づかされました。何を言っているかわからない、でもなんだか楽しい。みんな笑って騒いで言葉の壁なんて感じさせないほど仲良くなれました。

もうひとつ困ったこと、それは物の豊かさについてです。子供達は遊んでいる時によく風船を吹く動作をして「please」と言っていました。日本にいたら100円ショップで何十個と簡単に手に入るものです。むしろ無料で配っていることだってあります。日本で簡単に手に入るものが、ここではそう簡単ではない。簡単ではないどころか手に入らないこ

とだってありえます。シャワーもトイレもそうでしたが、日本では普通がここでは凄いことです。国自体の貧困の差があることは頭ではわかっていましたが、いざ自分が身を持って体験をするとすごく考えさせられました。バングラデシュで生活をしている間、日本には物が溢れすぎていると何度もおもいました。子供達が風船を欲しがった時、もし今子供達と遊んでいる場所が日本ならすぐにものを与えていたと思います。なぜならすぐに手に入るものだからです。でもここはバングラデシュです。与えればいずれ数が底をつき与えることができなくなり、他に欲しかった子にまで行き届かない。だから与えることができない。私はそのときも「ごめんね。」と言いました。

なぜ同じ地球上の生き物なのにこんなにも差が生まれてしまったのか。生まれてしまったその差をなぜ縮めることができないのか。私はこのバングラデシュとゆう国のために一体なにができるのか。こんなちっぽけな人間一人が何をやったって何も変わらない。そういった気持ちもあります。でも何もしなかったら何も起こりません。何か、バングラデシュのために出来る事。何も目的がなく参加したツアーでしたが、参加したことによって目的ができました。私はその目的を果たすためにまたこのツアーに参加したいと思います。そして次参加した時には、このバングラデシュという素晴らしい国をより素晴らしい国にすることを念頭において挑みたいです。

大切な教育

共愛学園高等学校 下田尾 萌

「背骨は身体の中心にあり、どこよりも太く、様々な大切な部分とつながっている。だからしっかりとした背骨を持たずに生きていくのは大変で不便が多い。その重要な役割をする背骨が国にとっては教育である」とアルバートさんが語っていた。

私はこの二週間でその言葉の意味を知った気がする。

入国待ちが長かったので様々なバングラデシュの事情を聞いた。その中にバングラデシュには袖の下文化があるという話があった。お金のある人だけが生きやすいなんて、とても驚き悲しい気持ちになった。バングラデシュの大人たちは、小さい時に教わるべき、「ずるをしない。」「約束を守る。」「友だちと仲良くする。」「人の気持ちを思いやる。」といった人間として大切な基本を教わらなかったのだろうか？今の子どもたちにもそれらを教えてもらう機会や場所がないのだろうか？と思ったからだ。

日本の小学校では勉強だけでなく人としてのあるべき姿も教えてくれていたのだと改めて気付いた。人が人になるためには教育と学ぶ場所が必要なのだと思った。

だから今回訪問した小学校で、先生が子どもたちに向けて生きていく為に必要な知恵と、社会のルールを教えている姿を見た時はとても嬉しかった。協力し合い共に学ぶ子どもたちに明るい未来を感じた。バングラデシュで育つすべての子どもたちがせめてこのような基礎教育を受けられればどんなに良いかと思う。

教室に入ってみて印象的だったことは子どもたちの学ぶ姿である。彼らはキラキラと瞳を輝かせて、真剣にそして楽しそうな笑顔で授業を受けていた。勉強が好きで学校に来られて嬉しいのだろうかと会話をしなくても見ているだけで伝わってくるようだった。先生方もたくさんの工夫をほどこした授業を生き生きと行っていた。たとえ電気が無くても、雨もりがしてもそんなことはオシュビダナイ！活気と笑顔の溢れる教室に入ると、私も自然に笑顔になって子どもたちと一緒にベンガル語を叫んでいた。彼らは「学ぶことの楽しさ」を日本のどの学生よりも知っているのではないかと感じた。ある時、BDP スタッフのヘモントさんが子どもたちに「もっと勉強したいかい？高校や大学へ進みたいかい？」と尋ねた。子どもたちはみんな「高校や大学に行ってもっと勉強したい。」と答えた。私はとても感動したが同時に複雑な心境だった。100人の子供がいても大学まで進学出来るのは両手に収まるほどの人数だと事前に聞いていたからだ。彼らの学びたいという思いが何とかして叶わないだろうか？彼らのあの笑顔を守れないだろうか？と考えたが、自分の小ささを感じるばかりだった。バングラデシュでは子どもも立派な働き手であるから、貧しさなどの様々な理由で私と同じくらいの年かもっと小さな子も働いているという。街で見かけたリキシャの少年も幼い頃はあの子たちと同じ夢を持っていたのかと思うと胸が痛い。私に出来る事は何だろう。ツアー中も帰ってから考えている。バングラデシュで彼らの思いに触れたからには私にも何か役割があるはずだ。

彼らの生活をすぐに変化させるような大きな活動は出来ないけれど、AECF、BDP への支援を続け、今回の経験を一人でも多くの人に伝えようと思う。

遠く離れた日本から私にできる事はちっぽけだが、丈夫な背骨ができるように少しでも協力したいと強く願っている。

この二週間は日本では体験できないことをさせてもらいとても良い勉強になりました。そして本当にたくさんの学びと出会いそして別れがありました。そしてあっという間にこのスタディーツアーが終了しました。

バングラに行き一番感じたことは、『幸せ』という言葉です。バングラに行く前まで『幸せ』は、経済的にも裕福で食事ができそれなりに生活ができる事かと思っていました。しかし、私の考えは間違っていました。カティラでお家を訪問させてもらったときに感じました。そこのお家は小さく床は土と牛糞で作ったもので電気もありませんでしたがしかしお家の中は、とても整理整頓がしてありなによりも家族の笑顔がとてもすてきでした。私は、この時『幸せ』って物やお金でわないということをかんじました。日本はバングラに比べて 60 倍も豊かなのになぜ胸を張って『幸せだ』といえる人が少ないのか？と考えました。先進国となった日本には忘れかけている、忘れてい

る事がたくさんあるということを感じさせられました。BDPの学校に行ったとき子どもたちは、テストをやっている間に少し時間がありその時にお母さんたちとお話する機会がありました。お母さんたちに私たちが『何をしているときが一番幸せですか？』と質問した時、『家族のためにご飯を作っているとき、家族のために何かしているときが一番幸せです』と言っており本当に家族を大切にしているということを改めて感じることができました。もし私がお母さんだったら『買い物をしたり食べること』と言うと思います。ここが違うのだと思え直す機会が与えられました。

バングラの人たちはもてなしの心があることが学校や教会やBDPのスタッフ、先生、生徒のお家を訪問させてもらった時に感じました。日本から来た私たちのためにきれいなお花をプレゼントしてくれたり、踊ったり、歌ってくれて本当に嬉しかったです。そのあと外で短い時間だったけど遊んだ時にも考えずに楽しく遊ぶことができてとてもいい思い出になりました。お家を訪問させていただいたときたったときは、チャーやバナナ、パイナップル、マンゴー、クッキー他にも米から作った甘いおかしのパヤシをいただきました。もし私たちみたいな団体が家を訪れて来るとなったらこんなにすばらしい歓迎の仕方ができるか？と思いました。私は、申し訳ないけどここまでのことはできないと思え素晴らしい歓迎をしてくれたのだと感じました。

Aチームみんなとここまで仲良くなれるとは思っていませんでした。敬語という言葉はどこかへ知らぬ間に消え去りみんなで歌ったり、踊ったり、大爆笑したり、夕拝が終わって日記を書いたり、カティラを離れる3日前に泣いたり毎日充実した日々でした。恭子さんやすう子さんとも予想していた以上に楽しく、笑いが絶えない時を過ごせて幸せでした。カティラのBDPスタッフたちも一人一人のキャラがあり楽しく、無邪気にそして私たちの胸をキュンキュンさせてくれて何一つ不自由ない生活を送らせてもらいました。カティラで子どもたちは毎日来てくれて本当に嬉しかったし、毎日来てくれることでいろいろなことを考えさせられました。ベンガル語が話せなくてもかんげいない、遊びで心で通じ合うことができたと思います。下から果物の種を投げてくる少年に初めは困っていましたが子どもと変わらず遊んだり、話すことによりそれはなくなりました。私は、悪意があり投げて来るのかと思っていたけれどそうではありませんでした。やっぱり人は見た目ではわからないということを改めて感じることができました。

スタディーツアーにかかわってくださったすべての人に感謝したいです！ドンノパット☆

50 倍の幸せ

山梨英和高等学校 窪川みかげ

バングラデシュから日本へ帰ってきて1週間。学校も始まり、学校と家の往復ばかりを繰り返す忙しい日々を過ごしている私にとって、バングラデシュでの生活が恋しくなる時が時々ある。はじめはあまりのカルチャーショックの大きさに、本当にここで2週間暮らすことができるのかと不安に思ったこともあった。しかし、BDPのスタッフさんや村の子供たち、そして何よりこのメンバーがいたからこそ不安から始まったこのスタディーツアーがあつという間の2週間になり、内容の濃い2週間を過ごすことができたのだと思う。みんなに出会えたことは本当に感謝したい。

バングラデシュでの生活の1日目にBDPスタッフであるアルバートさんからこのようなことを言われた。「日本はバングラデシュの50倍豊かであるが、日本人はバングラデシュ人の50倍幸せなのだろうか。」私は2週間そのことを1つのテーマにして過ごした。毎日あたり前のように起こる停電やゴミだらけの道路、すべて手でやるトイレなど日本に比べて不便なところがたくさんあったが、「もの」があるから幸せとか、ないから不幸せとかそういうのは全く関係ないのだということを2週間の滞在で気付かされた。

私がそう気づくことができた一番のきっかけは小学校訪問で子供たちの母親と話をした時だった。私たち日本人の「何をしているときが一番幸せか」という質問に対して「家族のために料理をしているとき」「子供の送り迎えをしているとき」と答えていたお母さん方を見てなんだか少し感動した。同時に日本人に同じ質問をしたら同じような答えが返ってくるかなと考えさせられた。「もの」があふれているがために「もの」によって支配されている私たち日本人はこのことを見習わなければいけないと思った。

そして、小学校であつた子供たちの笑顔は不幸せな生活を送っているような顔には決して見えず、私が想像していたように目がキラキラ輝いていた。

だから今はアルバートさんの質問に「No!!!」と素早く答えることができる。

忙しい毎日ではあるが、バングラデシュでの多くの出会いや多くの学びを常に頭の片隅に置いておき、また何年後かにこのツアーを通して行けたらいいなと思う。

バングラデシュに行って

大山 晏奈

バングラデシュ。そこはアジアの中で最貧国と言われている。私には海外経験はあるが、最貧国と言われるような発展途上国に行ったことはなかった。ということもあって、出発前はそれなりに緊張していた。8月15日の昼、私たちはバングラデシュの空港に着いた。私はそこで入国審査に2時間かかったり、車の中で、ゴミの山やスラムをみたり、インフラが整備されていないことを思うと、このような状態を発展途上というのかと思わされたが、都市でも後に訪れた田舎でも絶えなかった人の多さを思うと、これが最貧国なのかと疑った。と同時に、実際に行ってみないと、分からないことはたくさんあるものだ、ということが分かった。

私はAチームだったので、カティラに行った。池がとにかくたくさんあって、湿気も高かった。宿舎には、毎日近所に住む子どもたちが遊びに来てくれ、学校の登下校中の生徒も寄ってくれた。田舎はやはり貧しいというが、彼らの笑顔からは貧しさは感じられなかった。

カティラでの小学校訪問、これがやはりスタディーツアーで一番心に残ったものとなった。4校訪問したが、授業中にとりなりの友達と無駄話をしている子どもは一人もいなかった。皆が先生の話に耳を傾け、学べることは全部吸収してやる、という様子だったと言っても過言ではない。昔の私とは比べものにならないくらい、とにかく学習意欲は素晴らしかった。この子たち全員が大学を卒業できたら、バングラデシュは、それは素晴らしい国になるのではないか。ある小学校で「高校に通いたい人？」と質問したら、ほとんどの手が上がった。しかし私は、実際通える子どもがほんの一握りなのを知っていたので、本当に残念に思った。小さな校庭で元気いっぱい遊ぶ姿を思い出しては、勉強頑張って、と願う。

最後に、私たちを2週間にわたってお世話をしてくれたBDPのスタッフさんには本当に感謝したい。食事を作ってくれ、町中を歩くときは必ずそばにいてくれた。彼らのおかげで、私たちは全員無事に過ごし、日本に帰ってきた。また、スタッフだけでなく、一緒にツアーに行ったメンバーの皆さんやツアーに行かせてくれた両親にも感謝したいと思う。
皆さんありがとうございました！バングラデシュで様々な事を考えたこの貴重な体験は、二度と忘れません。

バングラデシュでのスタディーツアーを終えて、早いことにもう1週間が過ぎようとしています。まだ1週間なのかもしれないけれど、モジャなカレーや果物、手を使つての食事、当たり前の停電、まぶしいくらいの子供たちの笑顔、通りのあちこちで見かけたククル、夜にやってくるコウモリ、蛙、野生の蛍、ダニや湿気でさえ何もかも懐かしく、今まで通りの生活に違和感さえ感じてしまいます。

バングラデシュで私はあらためて“幸せ”について考えました。「何をしているときに幸せですか？」と聞かれたらあなたはへと答えますか？

私は踊っているときだったり、ベッドでごろごろしているとき。“幸せ”について考えたとき、私たちはついつい自分本位になってしまいがちです。BDPの学校訪問で子供を通わせているお母さんたちと話す機会がありました。同じ質問をされたとき、皆そろって「家族といるとき」と答えました。生活面において日本はバングラデシュに比べ60倍豊かだと聞きました。しかし私たちは彼らより60倍幸せだと言えるのでしょうか。

私はAチームでカティラに行きました。毎日、朝から夕方まで子供たちが遊びに来てくれて、私は子供が大好きなので、幸せな充実した1週間を過ごしましたが、ひとつ気付いた悲しいことがありました。男の子みたいに活発で、すー子さんにオイラと名付けられた女の子(“ズム”というのだと思っていたら、昨年の報告書で“ジュームール”というのだと知りました。)。大家族でとても貧しい暮らしをしており、1日2食しか食べられず、7歳なのにとっても軽くて、小柄でした。BDPスクールに通っているようですが、一番下のクラスで授業についていけなくなり学校に行かなくなってしまったそうです。私たちが訪れたBDPスクールの子供たちはみんなとても楽しそうに学んでいたのもそのような現実もあるのだと思うと胸が痛みました。また、貧しい家庭だからか他の子供たちや私たちくらいの男子が遊びに来ると追い出されてしまったり、きつい言葉をかけられていたり(そう見えただけでもありませんが)していて貧富の差を目の当たりにし、ただ眺めるだけで何もしてやれない自分や、これは彼らの問題なんだと割り切ってしまう自分に苛立ちを覚えました。

そんな現実を抱えながらも私たちと過ごすとき本当に楽しそうにしている、遊んであげていたはずがいつの間にか私が遊んでもらっていた気がします。彼女たちの生活に関わる機会はおもてなかったけれど、共に過ごした1週間が私の“幸せ”になったように、彼女たちの“幸せ”の1部になってくれていたらと思います。

ここには書ききれないほど、バングラデシュは私にたくさんのことを学び、感じ、吸収する機会を与えてくれました。いつもモジャな食事をつくってくれたBDPスタッフさん、シュンドールな子供たち、最高のメンバー、笑顔で送り出してくれた両親、関わってくださったすべての人に感謝します。そして、オイラが学校に行けるようになることを祈り、出会った子供たちとの再会を信じて、またバングラデシュに帰ってきたいです!!

人々の温かさ

東洋英和女学院高等部 1 年 佐藤真依子

ツアーに参加する前。バングラデシュも含め、貧しい国の様子は写真やTVで何度か見たことがありましたが、なんとなく現実味がなくどこか疑っている自分がいました。そして生活の豊かさからなのか貧困の想像に限界がある自分にとっても失望しある意味の貧しさを感じていました。

それがこのツアーの参加を決心した1つの理由でもあります。

2週間ぶりに日本に帰国し、日本の建物、衛生状態、交通、水道、電気など様々なものを見て私は改めてバングラデシュと日本の違いに衝撃を受けるとともに、日本の豊かさを実感しました。

しかし、私の心の中にはなぜか“さびしさ”があったのです。

日本は便利な物であふれています。ですから「一人でも生きていける。」そうさえも思えてしまいます。蛇口をひねればきれいな水が出て、スイッチを押せば機械が何でもしてくれる。欲しいものがあればすぐ買える。私はそんな日本に住んでいて、それが当たり前でした。また、そんな「物に囲まれた便利な生活」に幸せを感じていました。

確かにバングラデシュは貧しい国でした。物は少なく不便を感じることもありました。

しかし、バングラデシュには日本にはないものもたくさんあったのです。豊かな自然や人々のつながり、温かさ、そして子ども達の素直できらきらした笑顔。その子どもらしさの中には、日本の子どもにはない逞しさがありました。

子ども達の笑顔に何度元気づけられたことでしょうか。人々に何度助けられたのでしょうか。

私は大空の下、バングラデシュで人々の温かさに触れ、本当の幸せを感じられた気がしました。

そして、日本。高層ビルで空のあまり見えない東京。人はたくさんいるのに孤独でした。

日本は豊かです。そんな日本に生まれた私たちは幸せな人間でしょう。しかし今の日本は本当の幸せ、つまり精神的な豊かさを失いつつある気がします。日本は発展する中でそれらを忘れてしまったのかもしれない。ツアーに参加し私の中の「幸せ」の価値観が大きく変化しました。

たくさんの海外企業が進出しつつあるバングラデシュはこれから大きく発展していくでしょう。しかし、それが国全体であるように、どんな人でも豊かになれるように助け、見守っていくのが私たち先進国の務めだと思います。そして、私もそれに少しでも協力出来たらいいなと思います。

バングラデシュの良さ、大好きなところを失わずに発展していくことを願うばかりです。

私たち一人一人を考えて下さった BDP, ACEF のみなさん、現地で出会ったすべての人々に感謝しています。

大学生になったら絶対行くぞ！と強くおもう今日この頃です。

編集後記

2013.
9/22 & 9/26
@ ACEF
事務所



とみー

みずき

スタッフ参加者の皆さん！
編集のページを担当して頂いて、
ありがとうございます！
とっても素敵に
になりました！
目を通して下さい♡
編集委員の3人と赤子さん、
お揃いの3人♡
お揃いの3人♡
お揃いの3人♡

懐かしい
スタッフの
日々を思い出したら
また元気で編集して行こう



くまぐもく
読んでください!!
ありがとう♡

お菓子を食べてから、
ふたりの編集
とて楽しいです!



※編集後記を書く日に
みかげは用があって
来れなかったのど、
2人(とみー+まいこ)が
みかげに寄せ書き
します♡♡♡

あんなに
手伝いに
来てくれ
ありがとう♡



あんなにです。
編集のお手伝い
に来ました。
楽しかったです!

TO.
MIKAGE♡

みかげ! 編集委員おつかれ
さま! 一緒に仕事して、
おかしな話、笑い話、
たのしみにね♡ 努力の結晶
バリバリ盛ったこの編集紙、
デキ女々赤子さん♡
お話し大歓迎
しましよ♡
by TOMMY

みかげ!!!
おつかれさまです!!
一緒に仕事して、
おかしな話、
笑い話、
たのしみにね♡
努力の結晶
バリバリ盛ったこの編集紙、
デキ女々赤子さん♡
お話し大歓迎
しましよ♡
by TOMMY

まいこ

みかげ



タイトルの
「おしゅびだない！」
とは、ベンガル語で
「問題ない！」
という意味です。



Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

ACEF



会員募集

個人会員	年額 1 口	5,000 円
団体会員	年額 1 口	50,000 円
学生会員	年額 1 口	2,000 円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替 00100-0-185540

特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

http://www.acef.or.jp